# 21 柊原のおろごめ くぬぎばる

伝別 承 地 なし

[実施場所] ] 垂水市柊原の海岸 ] 新暦六月五日

伝承組織] 柊原子ども育成会

### [名称]

史』と記載する)には「おろがめ」、 その意味である。昭和四九年発行の『垂水市史』上巻』(以下『市め」は「込める」ことで、合わせて「馬を谷間に追い込むこと」が 「おろ」は「苙」と当て字されるが、 「おろんまえ」の名前が出て 家畜を飼う囲いのこと。

### [実施場所] 柊原地区の浜辺

の行事が扱われている。の月遅れである。『市史』には「年中行事 [実施時期] 今は新暦六月五日に行われるが、もともと旧暦の5月節句で、そ 端午の節句]

 $\mathcal{O}$ 

項にこ

### [伝承組織]

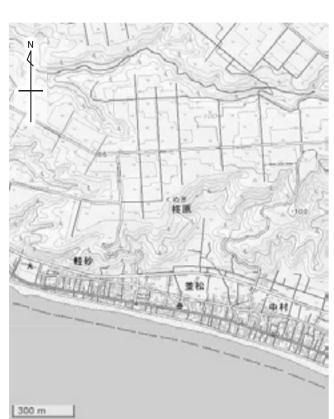
小学校が何らかの形でかかわっている。この行事には、柊原子ども会育成会、 柊原地区公民館、 市立柊原



男子児童同士の合戦



男女混合合戦



柊原集落周辺

### [由来・ 伝

で徐々に減り、 であることを考えると、たくましい子を育てることを主な目的とし くの集落で「おろごめ」が伝承されてきた。しかし、少子化の影響 たことが分かる。この趣旨は、今も明らかに受け継がれている。 た時期には浜平、 なお、 んで捕らえるのを見て、 摩藩の時代、 垂水市は現在一六集落、八小学校からなるが、 五月節句に行われたことと、参加者の主体が子どもたち 今は柊原地区一か所となった。 柊原二地域のみであった。 野生の馬を得んがため、 これを子どもらが競技化したものと言わ 先ず馬たちを谷間 『市史』 が発行され かつては多 品に追い

### 実施内容

### 参加資格

であったが、少子化が著しく進んだため一〇年ほど前から女児も加現在は、柊原小学校男女児童全員が原則。かつては男子児童のみ 生の役。馬役はその他の学年で、 わることになった。平成二九年には、 馬役を「おろ」から引っ張り出すのは、 男児七人、女児五人が参加し 「大頭」と呼び、 六年

### 事の準備

ながらも、 に掘られる。この作業は、 鉢状の穴で、これは柊原海岸の砂浜 ろ」と呼ぶ直径およそ四、五メート おろごめの舞台となるの 大人の協力を貰い 深さ一・五メートルほどのすり 前日まで は、

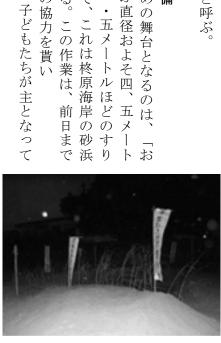


写真1 おろの回りに手製の旗が並ぶ

に寝たとある。 ら子どもたちは な お、 市 史 「おろ」 には、 の近く 前 夜

### 行事の 実際

ある。 らの服装は、 前日に手作りした「荒馬引き出 親たちも加わり、 当日 地区公民館に集まる。 そこで、 は、 参加する子どもらに 競技前の普段着で 彼らは松明や 午前二時に柊 子ども

す馬合戦」などと書いた旗を手にし、 大人の一 その頂上で、 人は ほら貝を吹きな

がら、 といくつかはおろの周辺に立てられる。男子は上半身裸に、 時には仲間が連れていかれてはならじと、親頭からもぎ取ろうとす るほうも必至である。足蹴りで逃れようとする。手を払いのけたり、 えるか、 小学校の先生らが見守る前で開始される。 の上に褌を着ける。女子は軽装の着衣そのままである。 に下りていく。持って行った旗のいくつかは、神社に奉納され、 て、その山を下り、浜に近い切目王子神社に参拝し、 安全を祈る。 大頭が小頭を穴の外にひっぱり出すために、 いよいよ午前五時半ころ、馬合戦「おろこめ」は、 地区内の上野大地と呼ばれる山に登る。 大きい体格の子は体ごと抱いて外に出そうとする。 その祈り方には特別な作法、唱え言葉はない。 相手の手や褌を捕ま 地区の人たち、 浜辺の「おろ」 防戦す そうし 行事の あ

した大人から聞くと、 在耳を引っ張ることは全く行われていない。かつておろごめを経験 は足蹴りをして防戦する、というようなことが書かれているが、 ったようだ。 市史」 一には、 特に女子が加わってから、 親頭は相手の耳をつかんで外に出そうと 耳が千切れることまではなかったが、 耳は引っ張らないと暗 相当痛 小 現 頭



写真 2 大頭が小頭をおろから 引っ張り出す

のうちにルール化したようであ

ない。 減はない。しかし、 ころまで、 涙を見せる場面は見られる。 混合試合になる。 勝負は、 競技中は、男も女も、また捕らえる方も捕えられる方も手加 何番も続く。 結局大頭側の勝ちになるわけだが、 この時、 女生徒が頑強な男生徒に引っ張り出され、 最初は男同志、女同志の合戦だが、あとは 大頭が女子の髪の毛を引っ張ることはし 夜がすっかり明ける 悔し

0)

ろごめ以外の競技が披露される場合もあるようだ。 なお、 おろは言ってみれば、観客に向けた競技場であるから、 お

らく取り組んだが勝負がつかなかった。 平成二九年には、相撲が強いといわれる二人の男子生徒が、 L ば

『市史』には、この日、おろごめの後にも、 水泳が行われたとある。 子どもらの相撲や浜

> 関連あったのかは、これも今は不明であるが、今後の研究のテーマ 域において先輩が、 一つといえよう。 ついて教え込んだとされる。おごろめが、 後輩たちに徹底的に、 学問や倫理や作法、 郷中教育とどれだけ 世 渡

学校行事に等しく、 が来ているという話を聞いた。子どもらにとっては、 校の先生は、校長以下、 その一つの証拠として、この日は早朝であるにもかかわらず、 地域も、学校も大いに教育的意義を認めていることは事実である。 ただ、現在のこの行事を見る限り、 手が抜けない行事である。 子どもらの競技をみるためにほとんど全員 先にも少しは触れてはいるが 運動会同様、 小学

残るものだが、この合戦はその時だけに納め、 人たちが指導していると言う。 終わりに、厳しい競技のあとには大にして勝っ あとに残さぬよう大 た負けたの確執が

# 他地域の類似行事]

はそれほど多くはない。 ように地域民にあたたかく見守られながら実施される子どもの行事 子どもが主体となったり、 相撲、 餅貰い(奄美)などないわけではないが、 子どもが参加する行事は、 おろごめの 県内でも綱

と直接的にどう結びつくのかは明らかでない。 るところがあり、 れて行われていたといわれるが、 垂水市以外に、 薩摩藩時代はそこで勇壮な「馬追い」が行事化さ 「おろ」という言葉が地名として残ってい 「おろごめ」という子どもの行

だけで、

全体的には子どもを鍛える、

[意義]

日本の伝統的祭り、

行事の大方は、

おろごめは、

のであることが明らかである。

承知のように、

鹿児島では薩摩藩の時代、

郷中教育が盛んで、

地



写真3 子どもらのおろ掘り作業



写真4 参加者集合写真

(小川 学夫)気あふれるくぬっばい~柊原づくり計画~』 同館・柊原地区公民館編集 二〇一三 『ひと・はま・みち 元水市 一年本・垂水市史編集委員会編 一九七四 『垂水市史 上巻』 垂[参考文献]

写真 1、 3 4は垂水市柊原公民館提供

Ж

### 22 加か 治木くも合戦ができる

伝別 名 なし

承 地 六月第三日曜日 姶良市加治 元 木町

[実施場所] 加治木福祉センター

[承組織] 加治木くも合戦保存会

[名称]

年まちの人々が作った学舎)・銀行前 町蒲生田通り・霧島神社、 者が中心になって第一回蜘蛛合戦が行われた。開催場所は、 わせ」と呼んでいた時代もある。 [実施場所] 「山蜘蛛合戦」。昭和一〇年は「蜘蛛合戦」と呼んでいた。現在は「加治木くも合戦」と言う。大会の名称は、大正 大正三年六月二五日 (映画館) 等と場所を変えて行っていた。戦後は一時途絶えてい (旧曆五月五日)、 西町門・蒲生田通り・有為社 (西町門)・菅原神社・加治木1生田通り・有為社 (明治一九 現姶良市加治木町の 一五年は 「蜘蛛合 加治木 商工

# [実施時期]

座

現在は、

「加治木福祉センター」で行われている。

終わってから見物に来ていた。以前は、 に開催していた。この日は学校が休みでないから学童たちは学校が現在は六月第三日曜日に実施しているが、以前は旧暦の五月五日 もでなく大人であった。 蜘蛛合戦は町の商工業者が始めた大人の大 クモを出場させるのは子ど



加治木福祉センター周辺



くも合戦の様子

会であった。

行事となり、会場には終日約五○○人もの見物人で賑わう。午後三時頃まで行われる。今では加治木商工会主催の加治木の伝統優良ぐもの部・合戦の部(大人・少年の部)などが午前八時半~

# [由来・伝承]

であった加治木町に受け継がれて来たと伝承されている。のがくも合戦の始まりであるといわれている。以来義弘公の城下町言ヤマコッ)の雌を集めて闘わせ、配下の武士たちの士気を高めたー島津義弘公が、朝鮮の役に出兵した際、陣中にて、コガネクモ(方

### 伝承組織]

にある町名である。

一子どもたちがクモを闘わせて遊ぶ風習は昔からあったが、大会形式で大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであ式で大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようであまで大人が熱中するくも合戦大会は、大正時代に発足したようである。

一五年は、町全体の店を休みにして、店員・従業員も参加できる体等の経営者等であった。有力商工業者たちの後押しもあって、大正力な米穀・雑穀業者、焼酎や味噌・醤油の醸造業者、呉服店、魚屋役等の関係役員は、全て加治木の「まち」の人々で、「まち」でも有くも合戦の審判長・審判委員・組み合わせ並びに記録委員・相談

制に持っていった。

とない行事になっていった。 た昭和初期以来、くも合戦はさらに権威を得て町を活性化するまた、昭和の有力者が祇園祭の頭屋として裃を着て臨み、審判長となっ

家が参加する大会になっている。 家が参加する大会になっている。 家が参加する大会になっている。今では姶良市だけでなく県内、県外からも多数のくも合戦愛好年一万円。市観光協会からも助成金を受けて、年々盛大になっていー人、副会長二人、理事一二人、監事二人、顧問若干名、会員一七一人、副会長二人、理事一二人、監事二人、顧問若干名、会員一七字。(平成三年八月結成)が運営全般を担っている。組織は、会長存会」(平成三年八月結成)が運営全般を担っている。組織は、会長存会」(平成三年八月結成)が運営全般を担っている。

奈良県一人、東京都一人であった。県一二六人、宮崎県三人、熊本県一一人、福岡県一人、兵庫県一人、人、優良グモの部に五七人の参加者で、参加者の居住地は、鹿児島平成二八年の大会参加者は、大人の部に七八人、少年の部に六三

## [実施内容]

# 優良グモの選定

や姿が整っていて美しいこと等を審査員が全員協議して決める。優良グモは「八頭身で、すらりとしたスタイル。色艶がよく、形

# 2 合戦の方法

合った時、一二センチメートルから一三センチメートルぐらいの所から出すクモを(シカケ)と言う。カマエとシカケが互いに向かいモシの先端に待機させるクモ(これをカマエという)を乗せる。後縦の棒に穴をあけて小さな横棒(ヒモシ)を差しこんだもので、ヒ当日は、会場正面に、勝負の土俵が設置される。これは、一本の当日は、会場正面に、勝負の土俵が設置される。これは、一本の

れる。 勝敗は熟練し 戦おうとしないと行司が砂を振り掛 けてクモを刺激して取り組ませる。 てから「つかみあい」を開始させる。 で止めてシカケクモが棒に糸をつけ た行司の鋭い目で行わ

### 3 勝敗の見分け方

るのは負け。 たものが勝ち。 下がった糸を噛り、 ドンに噛みついたものが勝ち。ぶら いものは引き分け。 モの糸(ケン)をかけたものが勝ち。 手のクモの後背尻 両方とも戦闘意欲のな 三回闘わせても逃げ 相手を振り落し ドン にク

## ルール

出 メスのコガネグモを一人三匹まで

場させることができる。 に出場できる の部は、 でそのクモは出場資格を失う。 合戦の部で三勝したものが王将 勝ち数の合計で順位を決め 負けた時点 合戦

写真2

くも合戦

王将戦はトーナメント方式で闘 優勝グモを決定する。

の朝に三匹を選定して会場に運ぶ。

そうすると、体が引き締まり闘争心がわいてくる。

その中から当日

らいを選び、大きくなりすぎたクモには三日前からエサを与えない。

大会一〇日前ぐらいになると、

出場クモを選ぶ。

一 〇 から五匹ぐ



写真1

勢いる。

くも合戦が近づくと、

優良くもの選定

三匹と決まっている。 最近では加治木周辺にクモが少なく

○匹近く捕る人もいる。

○匹ぐらいである。

なり、 たりして育てる。 たちの好物なので食べられないように蚊帳の中に入れたり網を張 ければならないクモ等がいて飼育も苦労する。クモは雀やヒヨドリ きく育つクモや卵を産んで細身になり、エサをたくさん食べさせな らせて大会まで飼育する。エサは昆虫のカナブンがよい。脱皮し大 の盛んな大隅半島の鹿屋市周辺まで連れて行き、 捕獲してきたクモは自宅の庭の木や、小屋の中、座敷等に巣を張 少年の部に出場する小学生たちをバスで薩摩半島南端や畜産 採取している。



日南方面まで出かける人もいる。

# クモの捕獲と調教

5

写真3 クモ採集に向う小学生たち

た大人の遊びである。事に生き残り今も活況を呈している。子どもの遊びの中から生まれ人々によって、大会が催され行事化が図られたために、今日まで見加治木のくも合戦は、大正時代から昭和初期に加治木の町方の

の古い記録には載っていないし、義弘公の数々の逸話を乗せているが治木くも合戦の義弘公起源説は、『鹿児島県史料、旧記雑録』等されたくも合戦は、この町方の衆が作り出した行事である。抗できるほどの経済力を持つ商工業者が大勢台頭してきた。行事化藩政期が終わると勢力を失った武士階層に代わり、鹿児島城下と対藩政制が木の町は、大口筋の集散地の港町として栄えた地であった。

年祭記録、加治木案内記』(大正七年『加治木古老物語』や『義弘公三百

刊行)

の中にも出てこない。

ある。
年間の『鹿児島新聞』記事のようで結びつけて最初に紹介したのは大正

蜘蛛でさえ敵に対しては斃れて後止る勇ましき武者振りを御覧ありて、捕えて戦わし、最後まで奮闘力戦す鮮出兵の際、休戦中、偶々山蜘蛛をに、三百年前の昔、島津義弘公が朝に、三百年前の昔、島津義弘公が朝

それ以来、加治木独特の行事になって今日に及んだとの事である。のは此の覚悟を以て出陣せよとの訓戒があったのがこの起こりで、むまで戦うの勇気あり、武士たるも蜘蛛でさえ敵に対しては斃れて後止しる勇ましき武者振りを御覧ありて、

(大正一四年六月二七日記事)。

る。 くも合戦の習俗』所収)。 のである(川嵜兼孝「くも合戦」に関する史料とその考察『加 化された。それを受け入れる社会的条件があり、 うであろう。 に濃厚に伝承する武勇の気風とも合致し、民衆の心に納得せしめた ては情に篤い。」人柄であったと加治木の人々は思っていた。事実そ 、々に信じられると、それはもう立派な史実として、 くも合戦の義弘公起源説は、この新聞記事を基として歩き始め クモが命をかけて闘う様は、 弘公は、「敵に対しては勇猛果敢、且つ知略に富み、部下に対し そういう加治木の人々の思いが新聞によって公に活字 かつて領主の膝元であった加治 その記事が多くの 独り歩き始め 治木 木

代まではそうであった。」と、 徒だったからよく知っている。(中略)現在加治木の大会では、 で続いているに過ぎない。 にある地方新聞の支局が思いついて催したのが例になって、 まで催されるようになったのは、大正時代以降のことだ。この土地 の遊戯になっているが、 「この競技が相当昔からあったことは事実だが、 元来は子供の遊戯であった。 僕はその頃、 海音寺潮五郎氏も書いている。 この土地にあった中学の このような大会 僕らの少年 今日ま 大人 生



写真4 合戦会場、待機中のクモ

### [参考文献]

加治木町教育委員会 一九九九 『加治木くも合戦の習俗』

(出村 卓三

### 23

### 横こ 山ま (種子島) の 盆踊り

別 名 な

承 地 西之表市 上办 西 横

Ш

伝

施 施 場 時 所 期 西之表 毎 年 七 市 月 上 第 西 |横山 日 曜 I横山 日 午 -後七 神 社 境内 時 半

伝 実 実

承

組

織

横山

『盆踊り

保

### [実施場所]

なっていたところで、 11 丘に囲まれた窪地に 横 山集落は西之表市 東海岸に向 位置する。 街 地  $\mathcal{O}$ 北 東 藩政時代に 約 兀 丰 代に 口 れる安納川 メ は ] 島 1 主の ル ほ 元の最上 良 ど、 、好な狩場と 周 周囲を低 流 部に

ことを実感させる。 殿がある。拝殿への階段を登る手前や階段付近のいくつかの石碑は、 居をくぐると、 に鳥居があり、 の石塔があ が隠れるようにして建 いわれについての伝承も途絶えつつあるが、ここが古い歴史を持つ 囲気の参道が延びる。 する境内となる。 女 人家のはずれのうっそうとした森が (二人に ŋ, ついては後述) 数段の階段を登ると楠 木立の中を正面の社殿に向 盆踊りの由来として語られる比志島国隆と阿久根千 右手の広い空間 拝殿背後のさらに少し高いところに本殿 小高くなった正面再奥にあまり大きくない拝 っている。これに向かって左側に一 の供養碑である。 は樹 木の 横 椎・栴檀などの Ш ない かってまっ 神 社 ゲート で る。 ボー すぐ古びた雰 巨木が 広 対 ル 1 (二基) (小祠) 場 道路脇 林立

代

はい

公民館を控え室とし

てこの

空間

で

踊 Ш

5

れる。

木

立

 $\mathcal{O}$ 

分を合わせるとかなり広

い敷地

である。

明治初めまでは公民

空間

(ゲー

トボー

ル

場)

の端に横

公民館が

建

0 向

て かっ

. る。 て右手

居

から拝殿までの

参道は林

の中だが、

神社

部分と露天の 盆踊り 経館の  $\mathcal{O}$ 広

横山神社周辺



盆踊りの様子

位 に 満 があったと言うが詳細永年中の創建という。 徳 中宗 在 は 遠 别 詳細  $\mathcal{O}$ (西之表: 場 本堂 は 所 不明で に  $\mathcal{O}$ 市 再 ほ街 圃 はかに客殿な 田地の現八1 ある。 が あ 0 ※や庫 坂 た。 神 裏などい 帯) 徳 寺 くつ のは 末 島

### 施

スピー・ で直会のみが行われる。 る。平成二八年は わ る地元有志 人たちによって吊るされ 在 にて 中止とな るころは薄暮である。 のこの地 頃より隣の広場にて盆踊 -代女の遺徳 手作 カーで流される。 小型スクリーンに写し出し、 七 夜 月 9, が制 区 第  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 同じ場所 作したもの 小学生数 小灯籠を献灯 七時 日 をし ょ 曜 り 日 から提灯を吊 0 盆 )をした。 る。 直近に集落内に不幸があった場合は盆踊り盆踊りが行われる。開始時は明るいが、終 ぶ紙芝居 は三人。一〇 踊 (茣蓙を敷いた露天、雨の場合は公民 横 である。 り 山 夕方六時 することが が 集 行 落 わ (パソコ るし 主 約 盆踊り保存会の 録音されたナレ れ 催 る。 頃 数 一五分ほどで終わ た中(林 0 より 個 楽しみとな 県 横 ン  $\mathcal{O}$ Щ  $\mathcal{O}$ ぼ提 内 神 間 0 画 0 灯 六六月 社 像 な ぼ が ーショ なってい メンバーでもあ をプロジェクタ  $\mathcal{O}$ 木 0 月 で 参 <u>i</u> 灯 少し暗 り、  $_{\mathcal{O}}$ 灯 拝 ン 者が 参道 るが が は 午後七 が小型 子ども 実 (館内) 訪れ に大現 · · · 施 さ

### 伝 承 組

によ に 石堂 ると大 している人も 山 し 盆 本 踊り な 正 いと は 成 昭 期 保 平 田 以 踊 和 っ て 踊 りを挙 いる。 三九 来 숲 盆 が って 枦之峯 年 踊 組 で、 りは 行できな 織 さ この時以 長く中 る。 れ、 池之久保の 集 現 い。 )。 村 断 落 来、 L 民 た。 0 六集 ] 旧 ほ 1田報告 それま の中に 満 とんどが 徳 落 寺の の は (参考文献 人々が合同 では横山 集落外 が参加し 地 元 横 を中心 Щ 7 参照 で踊 にだけ 住居 る

半島 自 さ は 刀、千 喜 不 び 南 ŧ -代女は を つか佐 玉 の 間 由 岬 冏 る 殉 久 死 か いら一人小り その年 根 L 出 に就 身 ょ 寬 永五 うっな . О  $\mathcal{O}$ 愛妾千 舟 任 を漕ぎ出して種子島に達 L 由 (一六二八) た比 月 来 代女 晦 譚 日、 女はこれを追って出「八)年二月、この地「四国隆は悪」 志 が 伝 切腹を命じら え 6 7 る。 れた国 した。 政 永 元(一 再 大隅 隆 配 内 会 流 容

た 右には め 料 た」、「死亡は  $\mathcal{O}$ 不 踊りであると伝えてい 在 のため 船 出 わから は 旧 坊 津であ 七月七日」などの ない。 る」、「 横 山 (T) 東 ハ々は 異伝があるが、 海 岸 右の二人の霊を供養する 0 庄 司 浦  $\mathcal{O}$ 確実なことは 漁 夫の 船 で

渡

史

0

 $\mathcal{O}$ 

### 実施 内 容

あ るが、 現 況に それらについては つい て 記 す。 楽器 で服 参考文献で確認された 装 など以 前と 11 < 分違 て いる点 が

夕竿を持つ)一人・太鼓打一人・太鼓持一人・鉦一人・鼓(つづみ) これを二重輪で囲 に 前 す 一人の合計五人 に立 る。 構成 かれ 白 抜きでひとつには )。これを二 っている。 一つ。山 りは楽とチョウ(チョウの 手側に大旗を持って二人(普段 踊 (これらを呼ぶ名称は りの む形 重 心で踊ら 間 「横山 輪 が囲 は 立 み、 ったままで動か 神 れ る。 社」、もうひとつには 公民 中心に 意味は ない 7館脇に歌い手四 が、本稿ではナカと仮称 位置するのはチョウ(七 ない。 着 不明)を中心として、 が 立 人が 盆 旗は紺 マイクの 踊 り」と 地

力 力 ナカの ラ  $\mathcal{O}$ チョウの 衣装 いう いバスロ み みは は 服 装は 0 0 ] 白くて長い ・ブの 背 覆 中に 太 旗 面 鼓 形)を着 持 をするの , を 除 シキブの モ モヒキ状の 1 鉦 て全員 が本来だが、 小 は 長 白い 角 白 ズ ・着物に ボンをはき、 0 Ŀ 鉢巻をして 一に白 足 帯をする。 白 後ろを背 草 「いカタ ナ

り載せるのでなく、 れに紐をつけて左手で下げ、 にこれを打 鼓を少し前に傾けて持 ナカの奏法 昔は笛もあった。 つ。太鼓には白い布が巻かれている。 太鼓持は腰のところで太鼓の両皮を上下にして、 左肩に少し当てる感じで左手で持ち、 つ。これと向かい合う形の太鼓打が両手交互 右手の小桴で叩く。 鉦は小皿形 鼓は左肩にしっか 右手で叩 ルで、こ 太

紙または銀紙を貼った緩い円錐形で、頂上に垂直に数本のカラフル 花笠の下に紫の布をかぶり、 児帯をした上から白い帯を締め、大小刀の二本差しをし、 キをする。 もとはウチワは男、 な造花を差す。笠の縁には白いシベを垂らし、顔の前だけは開ける。 扇子とシキブの小枝を添え、右手に扇子一本を持ち、花笠をかぶる。 キブ(樒)の小枝を添える。 の上に婦人用の幅広の黒帯の上から水色の帯をし、小刀一本を差し、 輪の衣装 ソトワ(外輪)は花笠をかぶる。 ナカを取り囲む二重 ソトワは女が担当したと村田報告にあ 布の残りを胸元まで垂らす。 右手に扇子を持つ。ソトワは白い着物 輪 のうち、 ウチワは白い着物に兵 ウチワ(内輪) 花笠は金 扇子とシ はカム

ウがナカの廻りを小走りに走るという場面がある。 向に動く。歌の区切りで全員がしゃがみこみ、七夕竿を持ったチョ計回り、ソトワは時計回りで二重輪を作り、以後それぞれがその方がウチワ。ナカのゆっくりした奏楽に合わせて出場。ウチワは反時旗・チョウ・太鼓・鉦・鼓の列を挟み、進行方向の右がナカワ、左踊り方 踊りは全体で約二○分。まず公民館横に三列に整列する。

- 出場 (輪ができたところを見計らって歌い手四人全員による歌開歌詞 今年歌われた歌詞(省略あり)を記す。省略分は後述。

二重輪はゆっくり動くだけで踊りはしない。)

おさまる御代こそ、めでたけれ。しょもくやらん、わが思い草、茂れ茂れ茂れ四人)たねとりてうれし、うえなわ、武蔵野の、

歌 が わ る ح 全 員 L Þ が む。 チ 彐 ウ が 立 5 上 がり「チョ ウ

と次の歌が始まる。以下各歌が終わるごとに同じことを繰り返す。)と言ってナカの周囲を三度小走りに走り回る。チョウが「ヤガテー」と叫ぶ

# 2 めでためでた

司じ)。 の所々に「ホー」という裏声の小さいかけ声がはいる。以下各節の所々に「ホー」という裏声の小さいかけ声がはいる。ウチワ・ソトでためでたの」を歌うところから全員立ち上がる。ウチワ・ソトんだまま。「ホー」というかけ声がはいり、次の四人が合唱で「め最初の「めでためでたの」を音頭が歌う。ここまでは全員しゃが

(音頭)(全員しゃがんだまま)

めでためでたのホー

(四人) (全員立ち上がる)

小倉(おぐら)九つ、御門(ごもん)八つ、めでためでたの、御殿(おんとの)屋敷、

カネをおろすは品川に。

船は千艘よの、

御金船(おんかねふね)よ、

**阿久根千代女**(ウチワ・ソトワともにシキブを右手に持って踊る)

3

可久限千代女はヨ、夜舟①(音頭)(全員しゃがんだまま)

阿久根千代女はヨ、夜舟(よぶね)漕ぐ、

(四人) (全員立ち上がる)

まして夜風もサ、寒かるど。寒かるどサ、寒かるどハイヤ、まして夜風もサ、寒かるど。イヤ、及もだるんど、手もだるんどハイヤ、阿久根千代女はヨ、夜舟漕ぐハイヤ、

② (四 人)

玉章(たまずさ)にマ、また歌かえてハイヤ、阿久根千代女はチ、チゴ心ハイヤ、

やると見たヤ、やると見たハイヤ、 花の恋の女(じょ)にヤ、やると見た。 の恋の女(じょ)にヤ、やると見た。

### 3 (四人)

うつつ名の立つタ、玉章 笹の露サ、笹の露ハイヤ、 水に浮き草サ、笹の露。 花の恋の女(じょ)のオ、 (たまずさ) にハイヤ おしゃれごとハイヤ

### (四人)

水に浮き草サ、笹の露。

4

これも浮世のモ、物語り。 これも浮世のモ、 嵐待ちたるコ、心してハイヤ、 物語りモ、物語りハイヤ、 坊のとばせにフ、船のりてハイヤ、 物語り。

# 春の夢(手踊)

4

(音頭) (全員しゃがんだまま) 春の夜(よ)の、

(四人) (全員立ち上がる)

くだかけの、そのきみぎみの、 春の夜の、夢おどろかす、

物思い、また逢うことは、

五つ川(いつかわ)の、深き心は、

身は捨て草で、捨てられて、 かぐち草、根びきにせんと、よいかわす、

流れしこの身は、淀川の、

何を頼りに、浮き草の、

波にゆられて、歌語ろう、 あはんや君が、なさけなや、

> よしなき恋を、 あきも別れも、せんなかれど、 身はうらみ草、何ぞそなたに、 めざましや、それは若草、 人にせかれて、おもしろや。

> > 逢い

たい話。

## 5 福神丸(手踊)

(音頭) ことしゃめでたいの、 (全員しゃがんだまま)

今年やよい年、宝の年よ、 立ちより聞けば、 何とさえずる、 末(すえ)の緑に鶴すえて、 二のや枝にはカネがなる、 ことしゃめでたいの、 こがねの台に松植えて、 の枝には銭がなる、 福神丸に、

思いのままに満腹(まんぷく)え。 道の小草に米(こめ)がなる、

6 列で退場) **引端**(立ったままウチワ・ソトワは右手に扇子を持ち、七夕竿を先頭に二

### (全員)

おがのこに、よしわら、 ちょうとでたよし、わかふじ袴きて見れば、 せんとみやまの、みやまの、おくの入りには、 きみおいた面白や。 たてそで長羽織、裾にゃうれし、

## [歌詞補足]

が 行 右 の歌詞 れている。 (平成二八年) 田報告より には 補足して記載する。 盆 踊 りの 時 間 配を短く するため É 省

- 玉かずらかけ、しばし。
  ①梅枝や、匂いにかげるわが心、富士のうらばにえおく露、
- おしこめととの浦。 ②鯉の小池、浮いたる船は、銀の白金、櫓こげや、
- 見そめ心のおもしろや。
  美女な小女郎がこと三味線で、ひかせ歌わせ語らせ舞わせ、③富士の岳から裾野を見れば、下には吉原名所がござる、
- 五つの水はにごらじと、

我が思い定かはあらして、川せいとはおぼろ月見るかたもなし、

あまりてもりておもしろや、ひとすじに寝てもさめても、いとしさに、

⑤やよいたつみは、花見のことよ、姉も妹も菅の笠、墨と硯は恋仲なれど、人が水さしゃ薄くなる。

- 千代をさえづる子鶴が、右端のかたに巣をくんで、⑥さてその次に、しまだいに松と竹とを植えまぜて、つみとり帰りのおもしろや。
- 船はせき船、やかたの内にも錦のへりに、⑦君の召したる、からきつくりの御船は、

の流れに亀遊ぶ。

んびす大黒、打ち出の小槌、

やのとことこに出

したる絵図

舞い舞うところ、やらめでたいや。

### [意義]

略

る。 こと南種子町西之の二か所のみ。 点で重要である。 氏 これを除けば 崎県に色濃く分布する七七調連続の口説盆踊りよりも古い形を残す ・三島村・十島 の報告で明ら Щ 盆踊 ŋ  $\mathcal{O}$ 同 系 特に七夕竿を持つ 村に見られるもの 盆踊りは は なっているが、 チ 彐 ウの 種 子 存 島の数地区にあったことが下野敏見 在 種子島以外で類似の盆踊りは屋久 である(チョウというかけ 0, 現在も伝承が続いているのはこ チョウの 鹿児島県本土にはなく、 存在は特筆すべきであ よる。)。 宮

### [その他]

以前、 た時代は四〇分以上もかかったと思われる。 歌詞は録音から起こしたもの を主体とするものに変化していることがわかる。とは言え更にそれ 筆者が見た時は、 つまり女性も混じった踊りから男子のみの した。 ワは婦人で、 以 全員浴衣であった。 上、平成二八年の 婦人も混じっていたかどうかはわからない。 現在の踊りの所要時間は約二〇分だが、 人数が足りない時 服装はチョウとカムキと花笠が今と同じである以 催 昭和 行 で、 四 基 一八年の づ 省略部分は村田報告を引用して記 は男子が女役として出たとある。 11 て記載したが、 村田報告では、 踊りに変わり、 全部の歌詞を なお右に掲載の その当 五. 年ほど前 服装も白 はソ 踊

### [参考文献]

- 南方新社・下野敏見 二〇一〇 南日本の民俗文化誌五種子島民俗芸能集』
- 児島県文化財調査報告書一五集』・西之表市教育委員会編 一九六八「西之表市横山の盆踊」 『鹿

田

熙

(松原 武実)



写真 1 ソトワ (外側の輪) の笠の頂点には花を立て、周囲は白いシベを垂らして顔を見えなくしている。手にはシキブの枝を持つ。 ※ 写真 1 ・ 2 は 2017 年 7 月に撮影。



写真 3 1998 年のソトワの衣装



写真 2 ウチワ (内側の輪) は侍姿でカム キをする。

# 24

六月燈

[実施場所]旧薩摩藩領内[矢 承 地]旧薩摩藩領内[別 名]なし (県内

宮崎県都城

伝承組織]各神社・寺・自治会

時

今でもこの

月一 以前に 日前 から八月まで行われている。は旧暦六月に旧薩摩藩領内で行われてい た。 現 在は新暦 七

### 所

社から始まって八月まで各地域で日程を決め開催されている。堂などと宮崎県都城)で、鹿児島県内では鹿児島市清水町八坂:旧薩摩藩領内(鹿児島県内各地の神社・寺・地域内の小さな! 旧薩摩斯 神 祠

## [伝承組

げ、灯籠を奉納するだけではなく、郷土芸能も奉納披露している。各神社・寺・自治会が主催しているが、中には保存会を立ち上

### 田 来• 伝承]

由来については二つある。



竹田神社周辺



照國神社 (鹿児島市) の六月燈

は 玉 名 义 に 次  $\mathcal{O}$ ょ う あ

ね < 行 L 給 れ ぶ 毎 観 山 たり 寺 ひ、 歳 是 六 あ っとぞ、 月 諸 人も 寬 陽 必 府 以 寄 公 ず れ 城 進の 其 を 面 下 守る 御 縁 襾 覾 略)」 時 日 音 とか 寺 参  $\mathcal{O}$ 立西 詣 定 傳 像 田 P 夜 多 に の村 カコ あ  $\mathcal{O}$ 中 此 り り 内 Ļ 上 て、 略) 幷 山 新 ک 大に 寺 又 秘 照 れ 観 佛院 に 音 燈 本 を لح 濫 を 府 安 陳の 置 觴 數 る L ぬ俗 て 多 あの六神東に ま燈月 社北あ

折、 たく 摩 れ 藩 が さん 主 例 島 لح  $\mathcal{O}$ 津 な 灯 光 り 籠 久 各寺 をとも が 鹿 足島市. Þ Ļ 新 れ 照 院 に 檀 に 家も あ 0 な た ら 観 0 音 て 堂 献 に 灯 参 詣 1 賑 L わた

ま 伝 宮 ŋ え に で ら Ł あ れ 伝 わ る ځ ŋ 言 広 れ う が が 六 0 たと言 月 7.燈の 始い

六月

灯

癸

祥

0

地

標識

発祥の地の

写真1

六 が 新 月 照 灯 院 発 町 祥  $\mathcal{O}$ い 上  $\mathcal{O}$ 地 Ш 寺 لح 跡 いう に は 標

識

立

0

て

る

写

真

1

落 に で ŧ لح う 月 0 て  $\mathcal{O}$ 0  $\mathcal{O}$ 次 お  $\mathcal{O}$ 灯 由 よう 明 来 あ は 12 げ 小 述 野 (オ べ 重 て ヘツメ 朗 いる 説 T で ゲ (概 明 を行 略 治 で 中 記 0 頃 7 す 11 指 た 宿 古 市 老 東  $\mathcal{O}$ 方 話 玉 利 を集

う 月  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 庚 風 ツ ア  $\mathcal{O}$ 神  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ メ 青 で な 集 ツ カゝ ア 8 ょ 吹 0 年 W うに K. た は さ を 晩 銭 集 え す ず (秋 か で ま 口 る る 0 庚 5 0 葉 ŋ  $\mathcal{O}$ 申 晦 升 て 集落 を 油 右 神 ほ 夜 日 どの [塔)、 した 社 明  $\mathcal{O}$ 火 け を 晚 内 タ方 とい ま ま 種  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ ツ ハ で点 青 家 で 油 t 1 · う。 毎 年 か を 々 K 7 買 を は L 5 晚 サ 二人ず 続 夜 口 11 ア け 明 ŋ 年 青 (早 る 守 オ 舎 け 年  $\mathcal{O}$ ま 馬 殿 0 舎 ツ に  $\mathcal{O}$ 12 メ 泊 で で  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 点 当 ま 守 意 保 ゼ ŋ ŋ 味 番 管 ン 油 込 神 続 を が  $\mathcal{O}$ た無くな 賞 けると 石 小 さな 塔) め、 旧い 暦 集

P

牛

馬

0

病

気が

大流

行

す

る

時

期

で

あ

り、

 $\blacksquare$ 

に

は

害

晩 を  $\mathcal{O}$ 8 虫 لح 精 に  $\mathcal{O}$ が よう 神 発 で 生 あ に 月 す り 灯 カュ  $\mathcal{O}$ る ŋ 5 を V 灯 で とも はい 拝 明 て 野 む る こと れは L 重 げ カン ぞれの て 朗 拝 がを は 4 六 古 す 神 月 灯 続 < Þ け カュ は に  $\mathcal{O}$ る 神 5 精  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ に に U 神 が 願 作 お を 法 願 で う カコ 六 あ で 11 け 月 るとさ す そ 5  $\mathcal{O}$ が る お 多 カコ 灯 5 れ

明

げ

 $\mathcal{O}$ 

で、

毎

逃

n

は

灯 る

n

見 ると 旧 薩  $\mathcal{O}$ 次 摩  $\mathcal{O}$ 藩 0 ょ 領  $\mathcal{O}$ う 内 説 で  $\mathcal{O}$ に あ 宮 そ る 崎 県 都 城 で 0 意 六 味 月 水と思 燈 に 1 が 0 11 込  $\Diamond$ て 都れ 城 7 市 11 7 る。 い上 史 る。 を

を 1 燈 音 鎮 旧 ボ は 堂 都 都 を  $\otimes$ シ 士 暦 城 城 る 修 市市 **(**灯 族 六 とも 月  $\mathcal{O}$ 復 で  $\mathcal{O}$ 籠とぼ 祭 L  $\mathcal{O}$ 六 伝えられ ŋ 八 灯 由 月 日 籠 来 燈 とも はは を に びしたこと、 イの降誕 とも 灯 いわ て 籠 11 を点し る。 れ 11 て、 たと 地 灯 も う 一 域に 籠 代 仏 **(**) を  $\mathcal{O}$ な う 二 献 ょ 中 تلح つ U 0 期  $\mathcal{O}$ 0 て神 て は 縁  $\mathcal{O}$ は 島 に 説 仏 島 六 津 ょ 月 . や諸 が 津 光 り あ 燈 忠 久 行 ŋ を 久 が Þ わ 0)  $\mathcal{O}$ 上 n ッ 六 霊 る。 命 Щ 月 魂 口 日

は、 毎 日 ま た、 夏  $\mathcal{O}$ が ょ うに 農 来 た 村 ことを 都 地 城 域 市 で 告 は  $\mathcal{O}$ どこ げ 田 る 植 カゝ え 六 0 で 月 花 終 燈 火が わ  $\mathcal{O}$ 0 花 打 た 火 5 七 上 月 で げ 12 あ 6 入 れて る と る。 ほ لح そ W n تلح

月 を 広 盆 け < 済 • 農 月 ま は 正 せ 月 村 燈 休 た む だ 地 لح む 後 け 域 *\* \ こと  $\mathcal{O}$ L  $\mathcal{O}$ う 暑 が カュ 小 行 1さき 0 で 休 祠 事 きた できる唯 ま が む Ţ こと で行 部  $\mathcal{O}$ L で  $\mathcal{O}$ わ 1  $\mathcal{O}$ 時 あ 階 で れ きな る。農 の 期 る 級 ように や格 日であ か 民 そ 0 式 に った。 た れ な  $\mathcal{O}$ لح ぞれ 農 0 あ こって た 民 る社寺だ ŧ  $\mathcal{O}$ 重 は、 日 「六月 を な 設 藩 け け 田 燈 政 で 時 た な え 代  $\langle$  $\mathcal{O}$ 時 は

### 内 容

土 れ た灯 月 燈 籠 特 と 徴 で 言 あ あえ る る ば 灯 ま神 籠 た社 な 境 が 六 内 月 B あ 燈  $\mathcal{O}$ 余 集 興 落 とし  $\mathcal{O}$ 小 て さ な 水 車 祠 カュ 堂 5 な n B

い代 表 す 内 0 る カュ  $\mathcal{O}$ ような・ を 六 月 介 燈 六月  $\mathcal{O}$ る 中 燈 カュ が 5 特に県 あ る  $\mathcal{O}$ 

神 て の吹 る  $\Xi$ 上 社 **,** \ 九  $\mathcal{O}$ 六 で、 帯 る か 町 州 月 は で 所  $\mathcal{O}$ 元 市 南 燈 さ で あ は 特 知 で 徴あ 南さ る。 あ は 覧 0 水 湯之元: る。 ま 町 車 る 0 豊 市 カュ 灯 ま郷 玉 加 5 籠 市 土 権 姫 世 < 加 芸 現 神  $\blacksquare$ ŋ  $\mathcal{O}$ を行 献 世能  $\mathcal{O}$ 社  $\mathcal{O}$ 六月 上と日 竹田 田田 を奉 灯 ない、は吹上田の竹田 0 --燈 置 納 神 市 社 L 1



写真2 照國神社

徴 は 次 あ る県  $\mathcal{O}$ 通りで 内  $\mathcal{O}$ あ 六 る。 月 燈 に 0 て 0)

詳

細

特

### 照 玉 神 社 鹿 児 と高市

ŋ ŋ

返 は

1

日 に 県 は  $\mathcal{O}$ 内 数 で 多 規 日 くの 間に 模 夜 人出 わ たり 店 が か軒を並べている。
り行われる。年代を即とも一番大きな六月際 -代を問 燈 わ とし ず 参 て 拝 七 者が 月 多 五 日

道

六

 $\underbrace{\overset{2}{\circ}}_{\circ}$ 灯 籠 も境 元内に、 ところ狭しと大小数多く 献 灯 さ れ て 1 る 写 真

لح  $\mathcal{O}$ 1 ま た、 わ 号 れ 照国 を 盛んであ 授 か 神 ŋ 社 る。 社 を 松 創 照建 国 原 神社 建した。 回神社は・ 南 は文久三 田洲神社 は鹿 八六三) 児 島 市 0) 年 照 大 玉 六 月 大 明 燈

### 田 神 社 南 さ 0 ま 市

車 竹 カゝ 5 くり غ 郷 土 芸 能  $\mathcal{O}$ ŋ が 奉 納 さ れ る

真直替  $\underbrace{3}_{\circ}$ え 水水 車 カュ な 5 くり 神 社 力で 六月燈 前 は 上  $\mathcal{O}$ 毎 に 用 年 あ水 士 路 る 演 舞 目  $\mathcal{O}$ 水を応 台 が 回利 じ るように て 用 L 人形など て舞 工 台 一夫され 下  $\mathcal{O}$ に 舞 水 台 車 設 を 置 る 水 が に 作 垂 1)

> 三日 士 公た 踊  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ が 日 その 正忌 ŋ カュ に É と言 納 竹 現 後 踊 日 さ 田在 ŧ ることに に う れ 神は 引 お るよ 社境内には新暦七月 き続 弔 j 11 き六月 とし な 津 2 貴な た 7 久

命 士 踊 ŋ は れ 忠良 公 0) 制作 : で出 お 11 陣 7  $\mathcal{O}$ 盛 前に部 一大に奉 納 下 さ  $\mathcal{O}$ 士れ 卒を集め る 写 真 て 4 士 •  $\underbrace{5}_{\circ}$ 踊

ŋ

太鼓持 たり 者 踊 踊 ŋ り (スパイ)を見破るというの は L は 二才 5 な 飛 がら 0) び 上が 他 踊 う唄を歌り ŋ 唄だけ って頭 لح 稚 うの 児 歌う稚児が 0 踊 上 で り あ 一で手を が る。 あ が り、 おり、 起 合 打 源 义 0 歌 で 0 た 詞 あると言 太鼓と歌を交互 手拍子に り もそれぞ 四股を踏 \_\_う。 よっ れ に んだり、 稚児 て敵 あ る。 踊  $\mathcal{O}$ 

踊 口

0

し

才

士

を

Ü

5

た。



写真4 稚児踊り



二才踊り 写真5



竹田神社 写真3 の水車カラクリ

3 玉 姫 神 文 南 化九 財州 の市

社 で  $\mathcal{O}$ と 同 指 じ カュ 定 ように 6 有 くり 神 社 形 民 水  $\mathcal{O}$ 俗 面 前  $\mathcal{O}$ 12 を とを 垂 流 直 ħ 地元 地 .据えてある。 水 水路 では 車 か  $\mathcal{O}$ 「デ 5 水を くり ノメジンの 利 人 用 形 L 力 が ラク 水 奉 車 納 · は 竹 1 さ れ 田と神呼 る。

ら になって  $\mathcal{O}$ れ 歯 水 る。 車 車 が  $\mathcal{O}$ 仕 す 11 る。 掛け ぐそばに てあ 毎 年、 り、 カラクリ小屋 演 目 上に設置し が代 わ b, が あ てある ŋ, 人 形や ۲ 舞 舞 台  $\mathcal{O}$ 1で人形 台 小 設 屋 置 に しも作 が は 動 た くさ り くよう 替 え W

籠 納 は 鳥 さ れ 居 て か 5 1 る。 境 内 に 奉 納 さ れ 7 11 る。 拝 殿 前 に 大 き な 灯 籠 が

吹 上 町 帯 0 六 月 燈 日 置

が 横 るが じように け 水 て に 上 ここの なっている。) あ に 町 る 湯 用 水 水 竹 据 元 車 路 田 え は  $\mathcal{O}$ 神 付 前 用 水 社 け 珍 小を利用. 水路 は 水 るように作 L 湯之元権 車 い仕 からくり  $\mathcal{O}$ 水 して舞台設 掛 面 け こってあ 現 と並 であ や豊玉 で あっ 一行に設置されて る 設置を 回り るが 一姫神 (写真 すように 社今かは  $\mathcal{O}$ 6 から 水 車 基だけ! 、おり くり か な 6 っ (水車 くってい と 据 り えは

は マイ 上 ル 町 (花を飾ってあ ヅル 帯で奉納される灯 \_り 灯 (籠)、ハ

入って た 形 ス の込んだも スカシ 1 る)、 -カヅル 角ヅルなど華や ヅル (西瓜  $\mathcal{O}$ が 透 とかしが ぶを切っ 回ほ とん

クニ本 ŋ 灯 で 籠 口 ] . すの

て え ように、 紙 製  $\mathcal{O}$ エ ンジンとい わ れ

る

多 シップ 呼 んで ル ر ح  $\mathcal{O}$ に 1 る لح 年か 配 を (写真7)。 者は今でもこ ツ 鹿 口 児 島 と呼 県 内 ぶことが 各 0) 地 よう で

### 意

籠 燈 口 伝 は、 統  $\mathcal{O}$ 旧 9 くり 薩摩 行  $\mathcal{O}$ 事 現 E 日 在 藩 で 励 を あ ま 領 楽し る。  $\lambda$ で 内 んでいる。 長く で 老若男女が、 みに精力 行 わ れ 魂 7 込 れ 11 た六 め て 7 年い 灯 る

写真7

吹上の灯籠

な 落民 また、 ŋ て りは、 いることは  $\mathcal{O}$ 協 以 年 古 前は 力 < から や回 保存会を立ちあ  $\mathcal{O}$ 県内各地 、伝統を守り続けていこうとする意欲がみら ある農業 ために舞 12 台設 あっ 用  $\mathcal{O}$ げ 置や人形 ただろうが現 用 たり 水路 L  $\mathcal{O}$ って、 作 水 ij, を 死三か所り 集落自治 利 水 車 用 L 。 の 点 て 会で守 L  $\mathcal{O}$ 検 カュ 水 などに 残 車 れる。 ŋ 0 カュ 続 て

V > <



写真6 水車カラクリ

化

### [参考文

け 集

- 『三国名勝図絵』 野重朗 『鹿児島民俗散 巻 歩 一九六六 九六 南 日 日 上本出版· 本 出 版 文化協会 文化協会
- 都 城市 史編 都 さん 城 市 委員 会編 九九六 城市史別編 【俗・文

牧 知 子

[実施場 伝別 [実施時期]毎年 承 地 所 一祇園 |鹿児島市清-]鹿児島 七月 市中 7第四日 央 水 町 八坂神 曜 日 社

承組 織 かごしまおぎおんさぁ振興会 鹿児島市清水町 八坂神 社

伝

高見馬場

か 6 朝 日 通

### [名称]

ぎおんさぁ」で進めることにする。 ぎおんさぁ) されたのは、二〇一二年で、そのときの名称は「鹿児島祇園祭 めて言っている。 祇園祭りであるが「おぎおんさぁ」と鹿児島県民は親 巡行行列」である。このようなことから、本稿は 鹿児島市の無形民俗文化財 (風俗習慣) に指定 ひみを込 つ お

## 実施場所

に集合 神輿に御霊を遷 し高見馬場まで る高見馬場 神幸行列で市 水町にある八坂神社 行止めとなり、 鹿児島市の中心部で 市の繁華街 0 商 の中心部に向 電車 工 周する。 会議所前 である。 番神輿を先頭 バスとも運行 行 (電車通りを挟んで)を朝日通りで折り返 われる行事 かう。 巡行行列の行われる電車通りは全面通 (かごしまおぎおんさぁ振興会がある) 午前中、 午後、 であ ル に 、本番の巡行行列が祇園傘・鉾、数基の 八坂神社で神事を行 る。 トは大きく変更される。 祭りの 本 体神 が行われ 社 は 番 清

### [実施時期]

前は毎年六月 五. 日 に神幸行列が行 われてい たが 改曆後

は



高見馬場から朝日通り周辺



稚児あげ

在に至っている。 をあげての (ができなくなるということで、 頃 雨 まだ祇 参加する予定の青年達が勤務を休め 重 な であったが、 るということ 0) ために 休みをとる企業 で、 様々な事 七 七月第四日 月二 情により七月二五日が 五. ・会社などが多く、 日 曜日に変更に なくなり 変更に 0 巡行行 平、日市

### 伝承組織

まおぎおんさぁ振興会で保存伝承している。 氏子制度をとっていないの 所内)」に変更になった。 「八坂神社祇園奉賛会 (鹿児島市商工会議所内)」であったが、二 一六年から「かごしまおぎおんさぁ おぎおんさぁ (祇園: 八坂神社祇園祭りであるが、 ŋ で、 0 上町・下町の 伝 承保 振興 存 0 会 運 地域の 堂団 (鹿児島 体 人々とかごし は 八坂神社は 市 昨 商工会議 年まで

# [由来・伝承]

であったが、やがて、 祭神である牛頭天王はもともと疫病神として災いをもたらす存在 頭天王を祀り、 国六六か国にちなんで、二丈(六メートル)の鉾六六本を立 れるようになった。 おぎおんさぁ の流れをくんでおり、 悪疫退散の祈祷をしたことに由 (祇園祭り) 疫病を封じ人々を守護する神として信仰さ は 全国に 京 都 祇 疫病が流行った時に、 袁 社の 祭 来する。 礼 (祇 遠 ・ 祇園社の 本を立て牛 本 社 祇 袁

商売繋盛も祈願するようになる。 - 元禄元(九七〇)年から毎年行われるようになった。その後.

√町に遷宮されたとなっている。 1─鹿児島神社誌─』によれば、享保一三(一八四四)年に現清鹿児島に祇園社を勧請した年代は不明であるが『ふるさとのお

(一六一三)年甲寅八月廿日の知行名寄帳の終わりに(略)祇園また、祇園祭については『三国名勝図会』によると、「慶長一九

二日和泉屋坊(マチ)へ授けら あ へ受け渡すこと。」などが書いてある。 中 また、「寛永九年(一六三二)神輿を作られ、 -祭り (T) 費用 のため、 新 土 六月一六日、 地 が寄 附 され 六日坊の年の わ 5 の正月廿 (マチ)

(る)ということを有村某の日記に載せてある。また、「正保元年(一六四四)祇園の山の始まり、高砂の翁姥を

飾

と思う。 このことから、慶長一九年から祇園祭りは行われたとしてよ

### [実施内容]

を明か 還る。 社を発与、 大正一〇年の っし、 早朝に発与し という御神幸行列であ その 夜明け前お旅所である照国 後、 例を見ると、 お旅所である照国神社に着与し、ここで一 清 水町 った。 八坂神社 築 町 本社に 神 坂 社を発与し築町の分社 神 社 分社 昼頃着与。 で降神 タ 方、 0 夜 本

その後、昭和四七年築町の八坂神社お旅所はなくなり、一日だけとなった。様々な社会状況により、照国神社での昭和三九年になると交通事情など

社へは立ち寄っていた。お旅所泊まりはなくなったが照国神が移転し、そこからの出発となった。昭和六三年まで平之町へ八坂神社本社の北が廃止になる。また、この年から

る。
へ移転(元の地に還った。)し現在に至へ移転(元の地に還った。)し現在に至平成元年になり、八坂神社は清水町

没る。
現在の巡行行列の概略は次の通りで

前

日

0)

夜、

宵祭り

が

行

わ

れ

伝統芸能などの演技が行

わ

れ

. る。

写真1 八坂神社を出発した御輿

などの 八公園 (写真1 基 日 御神  $\mathcal{O}$ ま が 神 で 行 輿 幸 わ前 لح 番 れ中 行 列 祇 神 が行 遠 輿 御 傘 を 霊 坂 · 先 頭 わ を 中一 る

神

社

か所で子ども  $\mathcal{O}$ 

で清め 高 康を祈って 「稚児あげ」 (子どもが健康に 々と持ち上げ 神輿 の前方に付いてい <u>る</u> が行われる る鈴に子どもを触れさせ、 (写真2)。 育 つように、 子どもを塩 子どもを

で神輿を 1 その時 ヤー」と大きな声を掛け合っている。 の掛 担 いでの は声は 行列 ソ 0 イヤー、 時 ŧ ッソ ソイヤー・ソイヤー、 イヤー、 ソイヤー・ソイヤー ソ イヤー」

パおり、 采ば て いる。  $\mathcal{O}$ を 神 この人は助頭と呼ばをする。頭の助手が一体憩や出発など全て神輿の責任者は頭り この て と ば

巡行行列(大榊)

伝

れ人の呼

上にが町露行午 ・下町両地が入る。 榊 町、両社 猿 田 彦 面  $\mathcal{O}$ 行 を 祇地列巡 付 東 方は行 け 傘車先行 て 頭列



る。 行 列  $\mathcal{O}$ 中  $\mathcal{O}$ 祇 袁 傘 鉾 と十一 載女 は 鹿 児 島  $\mathcal{O}$ 祇 遠 祭り  $\mathcal{O}$ 

遠 鉾  $\mathcal{O}$ 由 来 は 巡 行 行 列 0) 先頭 に <u>\frac{1}{2}</u> ち、 先払 ٧١ 0) 役目で八

にこれを渡すと

1 付 以

. う、 け 前

 $\mathcal{O}$ 

日

日だけ

 $\mathcal{O}$ 

奉

仕 せ 八

って

V

(写真

け

た榊

12

御 女

を

たもの

を入れ、

れ、頭に載い

お賽 を行

銭 社

を貰

ったとき

坂

神

で

お

祓

いを受

載

クは、 幣

は

年

配

 $\mathcal{O}$ 

巫



外では

すことはなく大切

下

る。

神  $\mathcal{O}$ 11

- 魂は

お れ

れぎお

んさ

守

ŋ

魂

中

祇 ら

と 御

社

で

お

を

7

ŧ

0

まっ

てあ

る。 外に出

鹿児島の「おぎお

んさ

いる)、

0)

傘と鉾で妙技

(練り

غ

1

を行っ

てい

る。

妙技

 $\mathcal{O}$ 

けた鉾と[ 技 た傘を付けそれを片手で持ち上げたり 人 腕 長 ☆ さ 一 は で 長 行う妙技を披露する。 額に載せたり、 メ V 竹竿を立てて、 同 じような長さの 1 1 ル前後の竹竿の 肩に載 バ ランス 竹竿に 傘と鉾の せたりと へをと 開 妙 1

な 妙 が技であ が 5 の動きであるので長年の る。 Þ 上 下 訓練を 代 重 ね て 行 わな V) لح 出 · 来な 保

ŋ

11

承し 祗 ている。 園 **外** 鉾 は 代 町 町  $\mathcal{O}$ 表 者 (頭) を中心に 存



写真 3-1

祇園傘の妙技



写真5 鉾の妙技



写真3-2 巡行行列

紡ぎを続けたと伝えられ、 のお供をするようになったからで を慕いあやかりたいとご神幸 ダヒメノミコトは勤 ナダヒメノミコト 祭神はスサノオ というと、 古くは なと呼ば 祇園 勉で一 1 社 ば れ 年中糸 その徳 クシナ る 行 ばの 列 れ



十二載女 写真6

また、 クシナダヒメノミコトが

えられている。 一二人分の仕事をした徳をたたえ、 勤労感謝の意を表したとも 伝

本社の女の神様と語り継がれ 衣装を着る人は八坂神社分社の男の神様で、 格の黒い衣装を着る人と一一人の赤い衣装を着る人がおり、 た年配者が引き継ぐと決まっていた。この中には 女の家柄、 この奉仕に携わることができるのは、 あるいは嫁へと近親者 っている。 で、 かつ、 親 • 月の 赤い衣装を着る人は 娘 八代々 一人のリーダー 障りのなくなっ 桜島出身の 黒い 巫

ようだ。」と言っていた。 古くは、 鹿児島では男性が女性のもとに通うことを 祇園さん

がほとんどで、しきたりが伝わらず形が変わってきている。 しかし、 数年前から公募で十二載女を募っているため 若い 女性

現在、大人神輿は一〇基、子ども神輿はそ御神馬は親子代々世話役が決まっており、 大人神輿は一〇基、 子ども神輿はその年によって増 農耕馬ではない。 [減が

行列が終わったら、神輿の上に稲穂を飾ってあるので「稲穂取り」 行事など全ての行事が終わったら清水町八坂神社に が行われる。 番神輿に八坂神社の御霊が載っているので、 「稲穂とり」の行事で取り外した一番神輿とご この 帰り 神輿 介は巡 御 番 霊遷 行

真7)。

町 輿

町  $\mathcal{O}$ は

傘 そ

好保存会

 $\mathcal{O}$ 

れ

上

代表者に渡さ

[その れる「坊ほぜ」とい 坊 一町の 八坂神 社で う

十二載女が桶を頭に載せて集落の公民館から八坂神社まで歩くが 豊祭が、一〇月一五日から一 女という年齢の違う世代である。ここに何か意味があるのではな 鹿児島市の「おぎおんさぁ」と坊津町の「坊ほぜ」の二つであ この十二載女は、 この二つの祭りに参加している十二載女の女性は、 鹿児島県内で、 十二載女が桶を頭に載せて祭りに参加する まだ初潮をみない女子と決まっている。 六日に行 わ れ 7 いる。 この豊祭でも 年配者と少 る。 0 は

### [参考文献

かと思う。

- 県神社誌 鹿児島神道青年会編 鹿児島神道青年会発行 集 九 九 五. 『ふるさとの お 社 鹿 児 島
- 牧原品口 虎雄監修 一九八二 『三国名勝図会』巻之三 潮 社
- 鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告書』№ 知子 二〇一三 「おぎおんさぁー鹿児島市の祇園祭りー

|児島国際大学文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム



写真7 稲穂とり

### 26 田崎神社の たさ きじんじゃ

「夏越祭り」 なごしまつ

ナゴッサ

伝 別

承 地 鹿屋市田崎町五 七 田 崎 神社

実施時期 旧六月三〇 日

実施場所 鹿屋市高須海岸

伝承組織 田崎地区各班より選出の宮委員

[名称]

と七体の神王面が、 月やお盆の節目を迎えるにあたって心身を清める「厄祓い行事」と 半分に分け、 理解されている。 市高須海岸まで巡行する。 鹿屋市田崎地区の田崎神社 実施場所. 六月の 野里地区を経由し約一〇キロメートル先の鹿屋 高須海水浴場の観音崎近くの岩場に設け (七狩長田貫神 社 から出発した神

まで乗って行く。バスから降りると高須集落経由で高須海岸まで行 神輿等は軽トラックで運び、人々は貸切バスで神社から高須三文字 下の神事ありて閙然する祭りなり」(閙然ぼうぜん=にぎやか)と 巡行は、騎馬の時代、耕運機の時代もあったというが、現在は、 『三国名勝図会』には「六月晦日には夏越の祭とて高洲の浦に濱 地区民が道路に出て迎える。道行すがら賽銭 高須地区では校区内放送を通じて到着した

ことを知らせるので、 列を仕立てて巡行する。

「七狩長田貫神社守幸給攸」のお札を授ける。

あり、

「濱殿下り」とも言われていたようである。

た斎場で、

夏越し祓の神事を行う。

田崎町周辺



夏越祭りの神事

### [実施時期]

旧暦六月三〇日で平成二八年は八月二日に行われ、

### 伝承組織]

に精通している人物が祭り全般を取り仕切っている。替るので、平成元年当時から神社の伶人で神社役員でもあり、事情現在は欠員があり一三人の宮委員で構成されている。宮委員は入れ田崎地区一六班から選出された宮委員が神社行事全てに参加する。

出さなくなった。 営等をする。直会の弁当は、神社側で用意する。数年前から酒類は高須地区では暑い時期なので、冷たい水やお茶等の準備やテント設区長さんたちと祭り当日の受け入れなどについて打ち合わせをする。 役員三人は、祭りの前日に高須地区に出かけ高須地区校区委員や

担っている。以前は中学生が行っていた。は、田崎地区少年育成会所属の小学五、六年生が神王面奉持の役を戦前は騎馬に乗り、神王面八躰を奉持して巡行していたが、現在

奉、高須浜ニテ権主取塩井差上(後略)」とある。所権主取等、田丸一内侍ニ内侍敷司笛役、其他社役三人騎馬ニテ供によると、「六月二九日、西之宮王子八躰高須へ浜下リ社司大宮司政明和六(一七六九)年の神社誌(鹿児島稲荷神社宮司本田親盛記)

現在は、八躰でなく七躰の面(王子面とか鼻高面と呼ばれている)巡行には参加しない。留守番役と言われている。た矛棒は出発前の祭典では社殿に他の面と一緒に並べ立てられるが、竿棒も折れてしまったので、現在は七面だけが巡行する。その折れ「昭和三〇年代に野里地区の坂道で耕運機が倒れ、王子面が壊れて、

が巡行する。 現在は、八躰でなく七躰の面(王子面とか鼻高面と呼ばれている

館、

「新田神社文書

神王面事件」)。

南九州で古くから行われて

いた神王面巡

目が飛び出している鼻高面である。製作年代は判明しないが、お面の裏に一から七までの番号がついている。五と六の面は古面で、

行の様子を今に伝える貴重な祭りである。

崎神社の夏越祭りは、鹿児島県史料集Ⅲ「!

赤

父親が宮委員であつた。 職員で手先の器用な方であった。 作って貰った面である。彼は農協 鹿屋市川東町在住の人物に頼んで 他の面は盗難に遭い昭和五五年に そらく近世初期頃作の面だろう。

ろう。 Ŕ ている。 る。全部の竿先には金鉾がついて センチメートルの銅鏡がついてい はみな面と鈴がついていたのであ 繋がれた鈴がつい を掲げて巡行する祭事が数例残っ 王面という。このように、 いる。巡行する神の依り代面を神 形跡がある。 にも金鎖があり、 二番、五番、 南九州の古い神社には神王面 七番の面の竿には直経一〇 おそらく八本の竿に 七番の竿は金鎖に 鈴が付いていた ている。 現在で 他の竿

で記されている(鹿児島県立図書覧元四(一二四六)年に八幡菩薩 関元四(一二四六)年に八幡菩薩 である神王面を掲げて巡行 の化身である神王面を掲げて巡行 の北方地頭鮫島家高勢力に打ち である神王面を掲げて巡行





写真1 盗難を免れた古面

### 実施内容」

当日の経過を述べる。

いる。 お盆以前に死者の出た家の一年間の厄払いの行事であると言われて 亀山 午前八時一〇分 .阿弥陀院神宮寺)跡の清掃に出かける。田崎神社夏越祭りは、 祭りに先立ち宮委員数人が神社近くの旧別当寺

廃仏毀釈以前の神仏習合時代か りの朝にするのは、この祭りが ことを示している。 ら引き継がれてきた祭りである 旧別当寺の清掃をこの夏越祭

を取り る。 納されている西宮を開け、 午前八時一五分 出して拝殿に立てて並べ や開け、仮面神王面が収

が参列。 拝礼、 の神事が始まる。 ·午前八時四〇分 宮司一杯などの神事を行 修祓、祝詞奏上、玉串 仮面奉持の小学生たち 宮司、 夏越し 神官



写真3 旧別当寺跡の清掃

トラックに乗せる。 午前九時三〇分 高須三文字到着。 参列者はチャーター 隊列を組んで歩きだす。 したバスに乗り込む。

午前九時

田崎神社より浜下り開始。

神輿、

神王面等は

軽

・午後二時三〇分

集落の境目(田崎一六班)の

九時四五分 高須海岸斎場着。

では高須地区の代表者(区長) 祭式は田崎神社で行われていた作法とほとんど同じであるが、 一〇時三〇分 祭典開始。 と遺族代表者玉串奉奠を行う。

地区から来た新盆の家族は、 一一時三〇分 清められた盛砂をビニール袋な

祭典終了。

てしまうので、この盛砂は田崎神社ため前日に盛っておくと潮に流され敷の四隅や墓に撒く。当日は大潮の の役員達が朝早く来て盛っておく。 その 浜 砂 は 屋

正 午 浜辺で直会

らく宴をして過ごす。この様子は奄参したご馳走や飲み物等を広げしばには帰らずに浜辺で宴席を設け、持 いる。  $\mathcal{O}$ 美あたりの 人々との宴。 神社側と地元の高須地区の出迎え 「浜下り」の様子と似て 新盆の家族は、すぐ

をする。 ラックが待っており、それに乗り込 集落此の役員の方々もそこまでつい を組んで高須三文字まで巡行。高須 んで帰る。 てくる。高須三文字にはバスと軽ト 終わりの儀式を行い。また隊列-後二時 直会終了。斎場に集合 高須集落の方々は見送り



写真5 参拝する遺族



写真4 高須海岸を進む行列

―」一行を迎えた人々はお賽銭を神 中に入れる。

禊である。 できた桶に入れた潮水を、 て参列者の頭に振り掛ける。 宮委員の一人が、 潮水を、笹に浸し高須浜から汲ん 清めの

神王面は、 祭り納めの神事を行う。 ・午後三時五五分 夏越祭りを終了。 午後三時三五分 西宮に奉納。 神社に .帰り着き、



写真6 盛砂を頂く遺族



写真7 遺族関係者、浜辺の宴



写真8 出迎え人に潮水で祓

を貼り、 で行われている伝統行事である。「茅の輪くぐり」や「蘇民将来札」 「夏越祭り」 厄除けをする風習が残っている。 は、 半年分のケガレを落とす行事で日本各地の神社

初盆との関係づけ等が、 田崎神社の「夏越祭り」は、八躰王子面が浜まで巡行することや、 他の「夏越祭り」と違っている。

神社の もあり、 このように、神王面が神輿などと一緒に巡行する祭礼は、 仮面巡行の浜下りをして「夏越祭」をするのは、 「鼻高ドン」巡行、東串良町大塚神社の「ナゴッサー」など 大隅半島に見られる共通の祭礼のようである。 肝付町岸良平田

出村 卓三)

南九州

の祭りの際立った特徴である。

### 27

# 七夕市と精霊迎えたなばたいち しょうろうむか

# 伝 別

[実施時期]每年新暦七月七日 承 地]曾於郡大崎町上町、 (旧暦七夕)

[実施場所]大崎町上町 伝承組織]上 一町青友会大崎町七夕実行委員会 七夕地蔵

とんどの方々が言っている。それは、現在七夕市が開かれていない 「七夕市と精霊迎え」が古い名称で、 現在では「精霊迎え」とほ

### 実施場所

地蔵」の所で行われている。 大崎町上町の南光寺という寺の隣接地に建てられた「七夕

立した地蔵尊も寺院と同時に失われた。地域民の変わらぬ精霊迎えわれていたが、明治二年の廃仏毀釈によって月笑寺の健剛和尚が建南光寺北側に「月笑寺」という寺院があり、そこで精霊迎えが行 がなくても地蔵尊参詣は廃仏毀釈後五〇年経過しても途絶えることの参詣と地蔵尊に寄せる思いは深く根付いており、その後も地蔵尊 はなかった。

大崎町上町七夕地蔵周辺

年に地蔵尊を建立して現在の場所に再建した。 これに感動した篤志家ほか三一人の篤信者の浄財により、 大正八

れている。 現在もこの地蔵尊での精霊迎えの参詣が行われている(写真1)。 は大崎郷の菩提寺「心慶寺」の隠居寺であったといわ



七夕地蔵尊



新暦の七夕(七月七日)にも行う 米の刈り入れ時期でもあるので、 行われていたが、この時期は早期 ようになったとのことである。 (月遅れの八月七日) に一日だけ !年七夕の日である七月七日

合間や昼休み、仕事を終えた後な 早朝から夕方まで田畑の仕事の

写真1 七夕地蔵の案内板

# 伝承組織

各人の都合のよい時間に三々五々訪れている。

を行っている。 上町青友会大崎町七夕実行委員会が伝承し、この七夕地蔵の管理 お賽銭箱、 お賽銭の管理運営なども行っている。

## [由来・伝承]

この寺は、大崎町の菩提寺「心慶寺」の隠居寺であったと言わ 現在の「南光寺」北側に「月笑寺」という寺院があった。

いて本堂に配し、宣伝と説教を行ったが成果は上がらなかった。参詣者も少なくさびれ、四代目住職竜山孤雲和尚は千体の仏像を描 年七月七日に開かれていた「七夕市」に「ここはかの世の入口であ 五代目健剛和尚は、月笑寺の門前寺坂の下り口に地蔵を建て、毎 みんなここでお迎えするのがよい。」と辻説法を行った。 お盆に精霊は、この地蔵さまの所より出て来られるのであるか

夕地蔵」が建てられ、人々はここにお参りしている。また、 霊迎えをするようになった。 も最近行われなくなり、人々は七夕地蔵にお参りするだけになった。 かし、月笑寺は廃仏毀釈でなくなり、 大正八年に現在地に「七 七夕市

来、七夕市に来る人々は月笑寺にお参りに来て、

線香をあげ精

座って初盆の供養をした。

ゴザを買い先祖を迎えた。

年買い替えた。

ザ屋でゴザを買い先祖の前

市にゴザ屋が出店しており、

かれていた頃は、

# [実施内容]

を七夕ゴボウと言っていた。

どを紹介する。 精霊迎えに来られた方々の様子な

の竹竿を立ててあった。 が吊ってあり、入口横には七夕飾 ている (写真2)。 早朝から多くの方々がお参りされ 七夕地蔵の所には灯籠 (角灯籠)

る。線香売り場には線香とお金を入供える線香を一東五○円で売ってい れる箱が置いてあり、線香の必要な し出ており、 人は線香を必要な束を取り箱の中に 七夕地蔵側の道路には露天商が少 向かい側には地蔵尊に

写真3

供え物

である。 お金を入れていく。 お釣りの必要な人はその中から取る。 信用販

家で一束供える家族などと、それぞれの家族のやり方 家五人でお参りに来れば、 五東買って一人一東ずつ供

える家族、

例えば、



写真2 七夕地蔵の参拝者

供える(写真3)。 で自由である。また、地蔵尊には線香のほか白米や焼酎、水などを

つけて線香置き場(香炉)に置いてお参りしている。 お参りする人々のほとんどは、線香の束を崩さず一束のまま火を

つ白こなる。り合って地蔵の前は煙で真お参りすると、線香が重なたくさんの人々が次々に

関係なく年に一度帰ってく親と娘、兄弟姉妹と年代に三代、若い夫婦と幼子、母かというと、老夫婦、親子が精霊迎えに来られているが精霊迎えな年代層の方々どのような年代層の方々



写真4 手水鉢

手を洗う人、お賽銭を洗う人などが次々と来てお参りして帰って行して夕地蔵の所に入って右側には手水鉢(石造り)があり、そこでる家族を迎えに来る。関係なく年に一度帰ってく関係なく年に一度帰ってく

て来るのを待っている様子が伺えた。たら遅くなったので、急いで来た。」などと、心から精霊さまが帰っい。」、「迎えに来るのを待っているので早く来た。」、「仕事をしていかない。」とか、「仕事に行く前に来ないと落ち着いて仕事が出来なお参りに来られた方々の話によると、「早く迎えに来ないと落ち着お参りに来られた方々の話によると、「早く迎えに来ないと落ち着

かれる (写真4)。

んで食事をすることである。特に豪農の所や名家の大きな家の一間一軒(表の間を一間)借りて、身内や近親者など初盆の関係者を呼初盆のお精霊さぁを迎えるために、地方から出てきた人々が民家を現在は「ゴシュアゲ」は廃れてしまった。「ゴシュアゲ」というのはカのセンサラ」、「トコロテン」を必ず食べるものであったという。き、親戚など親しい人々を呼んで、上町で「ゴシュアゲ」をして「フシ、親戚など親しい人々を呼んで、上町で「ゴシュアゲ」をして「フリ前は、初盆のところは、オセロさぁを七夕地蔵の所に迎えに行

を一日いくらということで借りた。

ていた「ゴシュアゲ」も最近は自宅で行うようになった。た。しかし、これも一〇年ほど前から姿を消した。この上町で行っこれが、次第に食堂などができてくると、そこで行うようになっ

って次のような二例の話を聞いた。 大崎町の近辺である志布志市で、「七夕地蔵菩薩の初盆参り」と言

笑寺の健剛和尚が建立した地蔵尊に参詣する。蔵参り」をする。伝承によると、江戸中期に七夕地蔵が所在する月めに近親者が連れ立って初精霊迎えの参詣に大崎町上町の「七夕地一例は、初盆を迎える家は初精霊(ハツジョウロウ)を迎えるた

の願いを聞き、極楽浄土に旅立たれるという。家に帰って来るようにと参る。この地蔵尊は旧暦七月七日に参詣者新精霊をはじめ先祖の精霊、無縁仏など全ての精霊が間違いなく

近親者と一緒に必ず食べるものであったという。上町で「ゴシュアゲ」をして「フカのセンサラ」、「トコロテン」を地蔵尊に白米や線香などを供え、お参りして家に帰るが、大崎町

扇ぎながら帰る。 帰りに七夕市で団扇を買って新精霊の家はこの方向ですよと招き

ツクイ(道作り)」と言って先祖の精霊の通り道の清掃をした。 精霊を迎えるにあたり、墓掃除や花筒(竹筒)の取りかえ、「ミッ

イと言う)に乗って家に帰り着くと言われている。 この地域では精霊(ショロドンという)はセミやトンボ(ボイボ

迎えに月笑寺まで行っていた。 二例目は一例目よりも大崎町に近い所で、初盆の家では新精霊を提げて目印としたとも言われている。

精霊を墓地まで迎えに行き帰って来るので、

提灯を家の高い

所に

ら極楽に行かれた。七夕の日に年に一度家族に会いたいと精霊様は建立した際、「門前の地蔵様は極楽の入口でみんな祖先は全てここか謂れは月笑寺の五代目住職である禅勇健剛和尚が一基の地蔵尊を

らそれぞれの家にお着きになる。必ず迎え火を焚いてお迎えするよ 焚いて先祖をお迎えした。 うに」との教えで、亡くなった方の近親者が参拝して地蔵尊に香を 地蔵様に手を引かれて帰っておいでになって一三日の夕方にここか 様はこの世に残したみんなに会えるのだと、 に極楽まで行かれる。 極楽を出発される。 てくださるようにと、香を焚いて精霊様にお願いするように、 門前の地蔵はそれを迎えるために七 みんなは私のところの精霊様も是非連 七日七晩足取りも軽く 日 7に、精霊が連れて来

ってお精霊様を乗せて帰ると言われていた。 参拝して帰りには上町で「ゴシュアゲ」をして団扇を買い腰に挿

た。これをマツカンジンといい、マツカンジンのときに歌う次のよまで毎晩、各家の木戸では取っていた松明を焚いて先祖を迎えてい うな歌があった。 七日は位牌を洗い精霊棚を作り先祖を迎えた。この晩 から一三 日

た方がおられ、下の写真のように今ではすっかり一体化してなじん だ姿になっている。 た近くの墓地に立っているが、近年、石工に頼んで頭を新しく作っ 古い地蔵尊は、首が廃仏毀釈で打ち落とされたまま月笑寺のあっ 「マツカンジン 火をくいやい 今くれたが ないすい

もおられる。墓地内にあるこの地蔵尊にも、 りに来た方々が線香や花を供えている(写真5-1・5-2)。 今でもこの地蔵尊にお参りしてから七夕地蔵尊の所に参られる方 自分の家の墓地にお参

·大崎町

九七五

『大崎町

史

大崎町役場発行

<u>二</u> 〇 五

『通山の郷土誌』

通

牧島

知 子 言社

通山地区ふるさとづくり委員会

山地区ふるさとづくり委員会

参考文献

救仁郷断二

九九 七

『新版

大崎町·

史

古代-

幕末! 編

至

お精霊さぁが帰って行かれる日については、一五日に家を出られて で迎えて一三日に家に帰って来られる」ということであった。また、 に帰る」、「団扇で扇ぎながら一緒にかえる」。もう一つは「今日ここ の例を聞くことができた。一つは「今日、帰る時に肩に載って一緒 このお精霊さぁはいつ帰って来るのかと言うことについて、二つ 週間かかって帰りつかれるので、 一週間後には墓参りに行くとの

ことであった。

が「七夕地蔵」の所で迎えるという風習は伝承されている。 るところもあるが、精霊迎えは今でも一日中絶えることなく、 ウを買うこともなくなり、精霊迎えも細かい部分では省略されてい 七夕市はなくなり、仏壇の前に敷くゴザを買うことも、七夕ゴボ







写真5-2 地蔵尊

### 前<sup>ま</sup>野の 御田植行事

名 前 野 集 落  $\mathcal{O}$ 田だ  $\mathcal{O}$ 

承 地 大島 郡 天城 町 祝ゥ 前 野 集田

落 植

時 期  $\equiv$ 月 から 月 期 作 田 植 時

期

場 所 前 野集落 の四 田及び各 地  $\mathcal{O}$ 舞 台

承 組 織 前 野 民 謡 保存会及び前 野 田 植 え歌 民 謡 保存会

伝

行事」と言う名称を吏用トう。名称で天城町の指定文化財となっているが、本その都度いろいろ使われてきた。「田植え唄・田植唄の名称は、「田植唄(前野集落)」、[名称] 「田植え唄」、 本稿では (前野集落)」と言う 前 野田植唄」 「前野御田植

### [実施場所]

歌う活動を始めている。野田植唄実演会」として、集落内の水田で実際に田植を行いながらはなくなり、舞台芸能として続けられてきたが、平成二三年から「前植に行われていた。減反政策以降水田が激減し、田で歌われることばれる神田や、新たに作られた田(ミーダ(新田))で初めての田 昭 和二〇年代頃までは、 徳之島 の開闢神話に関わる 「祝田」と 呼

期作

i 月 の

田植えでの実演となった。

平成二八年の調査時は八月一一日に行われた。の田植の際に行われていた。現在、三~四月の一期作田植時期に行われてい

1

る。

カュ

つては

祝

田

調査のために、二

[実施時期]

# 珧 町 S 松原士豆

前野集落周辺



御田植唄を歌う様子

### 伝 承組

る  $\mathcal{O}$ 田 <u>-</u>植で立てられていた幟には、前野民謡保存会」を中心に行 民謡保存会」を中心に行っている。平成二八年八月 「前野田植え唄民謡保存会」とあ 日

# [来・伝]

記神話 神 [曲 計 ] つて、 れている。 に関わる言い伝えがあるが、 御 田 植唄が歌われて 『集落誌 前野』には次のようにいた「祝田」には、徳之島の開闢

した。七いう神様が にの 大昔、大芸、 で、 住 任みついた。 住みついた。 は、北風も吹かず、雨の気もなく、明るくていい所な に。七つの山を越えてフーグシク(大城岳)についた。 に。七つの山を越えてフーグシク(大城岳)についた。 は、北風も吹かず、雨の気もなく、明るくていい所な に。七つの山を越えてフーグシク(大城岳)についた。 はみついた。山の上は北風が強く雨 大昔、アメキウデー(雨気岳:天城岳)にアメンキュと み

んぼを作って、岡前は を とにわにと を 信 行 れあ いって現在、 ると、 うる。 「! つ ながら、手足を洗い村に来て、田植え唄やナていたので、村の人たちは、太鼓を叩いて田て田植えをしなければ、自分の田が豊作になら、村中の男女は、どんなに忙しくても、必。「明日は、ユワダ(祝田)の田植えだよ。て現在、前野の村はずれのウッコー(大川)て現在、前野の村はずれのウッコー(大川) って て田 な て れの北にあるギアメンキュナ 豊作を祈願 イネを植えた。この 夫婦 して帰った。 前 野 原のの の低山 田んぼは、ユベハ村里に下り 田植えだよ。 田植え唄やナツメ踊鼓を叩いて田植え唄田が豊作にならないしくても、必ず祝田 に下りてきて、 便だからとい (大川) の近く ユワダ 」と言 · 祝 田) 田 0

な のい かつ 頃 近世近代以降の導入なのかは不明ではからこのような伝えがあるのか、また また古代から あ る が ここうし 0 関 連

> と自 た 由 体 来 は を持っていると言うこ 重 要な点であ

せて田植が行われた。しながら唄を歌い、そ 内平度の成 を叩き、男の田んぼのは 二八 ぼ年 の人 畦でチ い、そ 女で掛け合いを 月 ジ日 れ に合わ 、 ン (太 集

た。 の 鳥 イ 衣 .. メ メージによく使われる枡衣装はばらばらだが、田植 衣装はばらばらだが、 4、水が織り込まれた紺絣  $\mathcal{O}$ 

写真1 田の四隅を清める

から引用)。歌詞は次のようになって いる(『天城町文化遺産データベース』

## 田植唄の歌詞

ま米(ぐみ)まんだき ま米(ぐみ)まんだき きゅん人 ばバョ きゅわん田わ ん人(ちゅう)田ぐゎエーヌガ 田 《ここから女 「ぐゎ  $\exists$ ヌガ ] が 歌 1

> 始 8

オネガオー ネ

三月(さんぐゎ ち) 植 ゆる 田 わ Y  $\exists$ 

バ五バい一 ョ六ョ 筋 ] 月 ] 五. あぶし (ごろくぐゎち) あ六 めぶしまーくハ月(ごろくが ゆしじ) (ごろくぐゎ まくら ド ウ **《ここか** ] 5 とて なりし ] V . . ら り り が ] 1 歌 1 始  $\Diamond$ 

エきエき鎌うハ≪ ゆ ] ゆ カゝ まイ 手ら手らかう け り 彐 コネ うし うし さ さ ] 7 t ・ヌガ なぐ なぐ タ 《ここから女 が 歌

始

 $\Diamond$ 

まのゆネ女 たらガ らうまりた。 いなゅーこ  $\lambda$ 

5

W

バ

 $\exists$ 

1

4

1

ヌやヌや島きオ《 ま  $\exists$ こととうたりめいめいめ しゅー しゅ どう なー ] - ぎら -ゆぎ いら ゆ 1 

か 6

男

が

歌

1

始

8

 $\exists$ どな 

うたやハ≪ T り  $\Diamond$ ま イ  $\exists$ がなとヨ 彐 はゆ わ はちばち いっし、 いっし、 が تلح せ - コネヤ ŧ ] な ゆ 工 1 ぬー 日 ヌ 《ここから女が ガ ] 7 タ 歌 1

始

8

T う ヨり ] が わは がち どば せち ゆ 1

上がる。《女》 バいがバい雲 きゃ ョー下どなゆ が L きゅらさー 1 オ -たなー ] てい ネ だ ゆ 1 やてい い が 1 《ここか な 1 W L ?ら男 日 ]

きゃ 歌 V 、きゅ 始め ゅらさー Ś

W

彐 ] 下どな ゆ やて V

エわエわ袖道ハ《 l きかや 一きあたす -かかりぶさ -かかりぶさしっ かんばさしっ 1 オ ネ ] 彐 彐 る  $\exists$ コ なとて なとて ] ネ 《ここから女が エマヤ ] タ ヌ ガ

歌

始 8

ネ

ガ

才

1

ネ

くし < わオ≪ L が Y や植みゆ B -うま うま 4 ゆ ゆ  $\lambda$ 9 んる ŋ  $\lambda$ 田 | る| る なかなか ぐ わ 1 わー わ ] Y L L ] 日 くしやで 《ここから男が でど 歌 植 1 え 始 ゆ ]

 $\otimes$ 

*\* \



写真 2 唄を聞きながら田植を行う

エ大エ大な早ハー道ー道ねらイ 早らし 早らし ばたどやー (ふうみち) ばたどやーしが ぐわら ] オ ネー ば早らし ーし早らしヨ らーー ら | しが コネ ] ヤー L 工 ーヌガ ] 《ここから マタ 女が 歌 い 始

8

《女》 さばり ばーり きばーり きばり ばーり きばーり きばり ばーり きばーり きがり ばーり きばーり きばーり りよ今年や ッよ今年や《ここか》 5 やねきばい やねきば 始 ] 9 80 ŋ

など 田 植 が 出 えが終わると、 る。 昼 食となり、 正 月 作 0 豚 肉  $\mathcal{O}$ 塩 漬 け

本の を持っているという点にある。 前 歌謡 野御 田植行事の意義は、ここで歌われる田植唄が持っている日 芸能史上の重要性と共に、 徳之島の開闢説話との 関連

ギ・イザナミとの関連性が見える。いつの時期から徳之島にこうし アマミキヨ・シネリキヨ、引いては、 た伝承があるか不明だが、 アメンキュという神様夫婦が天から降りてきて、 の開闢神話であるアマミコ・シニレクや、 稲を植え、その田を「ユワダ(祝田)」という伝承は、 いずれにしても解明が待たれる。 日本の開闢神話 沖縄の開闢神話である 前野原に田を作 であるイザナ 奄美大

> 刈入れまでの様子を順番に歌い上げていく。こうすることで予祝す あることが注目される。ここではクェーナという形式の「アマウェ ると同時に、作業手順を伝承していることが考えられる。 ダー(天親田)」という御田植唄が歌われる。歌うのは男性のみ があり、 の始まりの場所とされている「受水走水(ウキンジュハインジュ)」 楽器の伴奏もない。内容は稲作のための整地から播種、 「親田御願(うぇーだぬうがん)」という田植の儀式が (ミフーダ)」及び「親田(ウェーダ)」と呼ばれる神 アマミキョ・シネリキョとの関連では、 本島 生育、 0

簡単にではあるが、農作業の様子が歌い込まれている。 同様のことは前野の田植唄の歌詞に見ることができ、三月の田 六月には「あぶしまーくら」と害虫駆除、そして刈り入れと、 植

明らかである。 時に、開田儀礼でもあるという側面を、前野の御田植行事も持って田御願(うぇーだぬうがん)」などのように御田植儀礼であると同 田として開発された場所でも、 田)」(「ミー」は琉球方言で「新しい」の意)、すなわち新しく いると言えよう。これはかつて、「祝田」だけではなく「ミーダ(新 伊勢神宮内宮の別宮である伊雑宮で行われる御田植式、沖縄の「親 この田植歌がことさら歌われた点で

文化財であると言える。 こうしたことから、 日 本の 稲作儀礼のあり方を考える上で貴重な

## [参考文献

- 松山光秀 二〇〇四 『徳之島 の民俗』未来社
- 「集落誌前野」編さん委員会編 九九四 **『集落誌** 前
- 『天城町文化遺産データベース』http://jmapps.ne. (平成三〇年二月一五日最終閲覧 jp/amagi/

(小島 摩文)

## 29 平山広田 (種子島) の石塔祭り

実施場 実施 伝 別 承 時 所 期 地 南 毎 南 な 年 種 種 八月 子 子 町 町 平 平 Щ 五. Щ 日 広 広 0 田 田 シ タ 方 五 集

落

### 伝 承組 織 広 田 集 落 、法華宗善福寺門 0 万五塔山

徒

### 広 名

[田石塔祭りと呼ぶ。称]

基の墓石がある。八月一五日の夕方五時から、中央のオコーソ(御店古い石塔が並んでいる。東側に接して善福寺の僧侶墓と伝える数落寄りの小山で、広い舗装道路から急な階段を登ると樹間の小空間があり、遺跡に隣接して平成二七年三月一日に広田遺跡ミュージアハ年現在、世帯数五二、人口九五人。海岸には広田漁港と広田遺跡 高祖) どで終了するが、 北東部に位置する。 で精霊送りの法要が行われる。 平山地区 石塔前で師匠(善福寺住職)による読経が始まる。三〇分ほ (中之町・ 翌朝午前六時より広田にある善福寺境内の石塔前 その 西之 南東海岸に近い集落が広田である。 広 田・ 浜田の 兀 は南種子 平成二の

# 前は係の大人が、小石塔前は老人組と小石塔祭りに欠かせない水棚は現在は一〇 五日の夕方五時より開始されるが、 (後述) 西之町 広田道跡

学生(数人)で作る。一三年年前中に、オコーソ石塔が準備は数日前から始まる。石塔のは要は、新暦八

オコーソ石塔前は係の大人が、

一三日には各戸は善福寺からオフダ

新曆八月一

[実施時期]

広田集落周辺



オコーソを囲む人々

をもら が 終わると数一○分で人々もいなくなり、 境内にて精 7 霊送りの法要が行われて盆行事は全て終了となる。 キを作るなどの 準備をする。 翌日早朝六時より、 — 五. 日 の石塔山での 法 福 要

### 伝

田集落の法 華宗門徒が参加する。 およそ半分が門徒である。

いった。 後種子島全島は法華宗に染まり、多くの法華寺院が村々に造られて が日良によって開山されたのが文明元(一四六九)年とされる。以 ることに成功。種子島家の菩提寺である法華宗本源寺(ほんげんじ) 良上人(淡路島出身という)が来島し、島主種子島時氏を改宗させ 害を受け、一四六三年、 種子島に弘通することを使命として帰島するも、異端邪宗として迫 た日展は堺にて修行中、 え)の浜で生き埋めにされる。まもなくして、日展の意志を継ぐ日 喜著)によると、 広田の善福寺もその一つである。 種子島 西之表の律宗寺院慈遠寺 は法華宗の島 日蓮宗の日隆上人と出会って改宗。これを 現在の西之表市街地に近い川迎(かわむか である。『種子島 (じおんじ) の の史跡』 僧であっ (徳永和

日の広田石塔祭りまで、連日各戸を訪問する回檀法要(棚経)が続山(平山で石塔山があるのは広田と浜田)をスタートとして、一五はここでは棚経(たなぎょう)と呼ばれ、八月一○日の浜田の石塔平山全域と茎永の一部にまで門徒を持っている。祖霊の前での法要 釈後、 中之町(なかのちょう)の今の平山神社の場所にあったが、廃仏毀 に集落西寄りの現在地(小高い丘上) 善福寺 小町(こまち)の峯」にあったが、 浜田・中之町(なかのちょう)・西之町(にしのちょう)の 田に再建された。 『南種子町郷土誌』によると、藩政時代の善福寺は平山 初めは石塔山のすぐ北側(集落背後)の に移転した。善福寺は現在は 参詣に不便なので昭和四七年

> では精霊は一三日にお寺に集まり、一六日の朝、帰っの翌日の一六日早朝の精霊送りはこの前で行われる。 ていたと言う。 霊送り 1福寺境内にも古い石塔があり、 石塔山 帰ったと伝えられ かつては広田 での石塔祭 'n

く掲げた。精霊迎え(一三日)の一週間から一○日前になると、旧ぐらい前から、境内の大木に白い布をつけた竹竿をくくりつけて高 とされたが、 よると、かつては一九日にも同じことをし、 りの石塔の上に注ぎ、村人たちも集まって来て、世間話に花を咲か チク竹を被せて火をつけて湧かした。湧いたお茶を先ほどの茶屋参 て積んでおき、茶屋参りの石塔の前(ほとんど道路)で、毎晩、三 窪んでいる。善福寺が旧地(小町の峯)にあった頃は、盆の一か月 ある)。六○センチメートルほどの高さの小さな石塔で、 リ)」があった。現公民館は集落のほぼ真ん中にあるが、これ はこれをもらって食べるのが楽しみだった。 せながらいただいた。お茶請けとしてササゲが用意され、 公民館庭に前もってキンチク竹を三メートルほどの長さに切り出 ぼに近いところにあった。道路も馬車が通れるほどの広さで、 和三七年頃にここへ移転したもの。それまでは少し南西寄りの もないが、 か四軒の家が当番となって、水を入れた数個の茶釜の上からキン 公民館前の道路を挟んだところに茶屋参りの石があった 独特な精霊迎えの習俗として「茶屋参り(チャ 現 なお善福寺門徒間では施 在はない。 餓 鬼棚は作らず、 精霊送りの最 『南種子町郷土誌』に 施 上が少し 子ども達 後の (現在も ヤンマイ 餓 鬼 その 田ん 供 L

旧

### [実施内容]

とつ(高さ約五○センチメートル)には五輪塔の笠部分とおぼ が四基あり、 書かれていない。 石が載っている。 オコーソ うち二つは横倒しになっている。立っているうちの 石塔山には中央にオコー もうひとつはそれより少し高く、 背後は少し盛り上が ってモッコ ソ (御高祖)と呼 ク・ウバ 板碑風だが何も ば メガシイ れる はしき ひ

七 チノキ 小石塔は全部で九つ。オコーソ側面に二つ、 かり、 もとは 松の 大木と蘇鉄があっ た。

とになる。 らないものの、もと同族であったろうことは直感されるところであ と思われるので、ひとつの小石塔には平均四・五戸が属していたこ 家が決まっている。オフダ(後述)の数を見ると多いところで数個 小石塔が同族であることの実証を試みている。 る。下野敏見氏は左記文献の中で、広田の集落構造の分析を通じて に半分埋も れる。広田の家数はおおよそ四〇数戸前後で推移してきた 同じ小石塔にお参りする家が現在は必ずしも親戚とは限 れる形で七つある。九つの小石塔はそれぞれお参りする 山際の土手

る。

あり、 字の略字で表記)。上部左右には二つの切り込みが入っている。こ りょううらぼんえすいこうぼさつ)」と書かれている 華経)の下に続けて普通の文字で「精霊盂蘭盆会水向菩薩(しょう せ、 ーソ前の れを竹の割れ目に挟んで、地面に突き刺している。すべて善福寺が ダを持ち寄って立てる。オフダは細長い紙片で、題目 の竹棒を土中に突き立て、小石塔背後の土壁にほぼ直角に には笹のついた竹を添える。小石塔の前の小さいのは、手前に二本 は簡略化されている。オコーソ前の大きいのは大人の腰の高さほど はその前日に集めておく。作り方には細かい習慣があったが、現在 水平に)二本の竹棒を突き刺して、先ほど立てた二本の棒と交差さ は納骨堂形式になっているので各家とも墓石はひとつ)と石塔山 オフダ 小さいのは一〇日午前中に、 その上に棚を作る。棚の脇には竹筒を突き立てて線香立とする。 四隅に竹棒を立てて上部にスノコ状の棚を作る。 小石 大きい水棚は二人の当番を決めて作る。九つある小石塔前 前述したように一三日に米二合と一〇〇円をもって各戸が オコーソにも小石塔にもそれぞれ水棚が設置される。オコ 各石塔の周辺には、参集の人々はお寺から配られたオフ 塔とオコーソに供える。 。各戸はだいたい三本ずつもらう。各戸の 老人組と子ども達が作る。材料の竹 新盆の家はそれ以外に新精霊 (菩薩は一文 (南無妙法蓮 四隅の竹棒 (地面と 墓 (多

がある。

シキビとソウハギの花瓶が二つ、水棚の前の両側に竹筒 (線香立て)

村人の代表数名がミズノコの入ったお重を手に集まってく

をカヤで連結し、その中央を竹棒に吊す。参集した人々は、 アオノクマダケランで包み、カヤで縛って蒸したもの。二つのマキ ら持参したマキが吊される。マキは餅米の粉を細長い団子状にして マキ をもらう。 各石塔の後ろには竹棒が横に渡されており、これに各戸 寺は で一五 ○本ほどを用意するとい 以上の

お重と、水の入ったバケツまたはヤカンを置く。オコーソ前こはン蕉の茎を細かく刻み、その上にシキビや色花を添える。)の入った

オフダやマキをオコーソと自分の属する小石塔に供え、ミズノコ(芭

キビ(西之表市ではシキブと言う。)とソウハギを生

けた花瓶があ

まる。法要の趣旨と諸仏の名前を読み上げる導入の後、妙法蓮華経て坐している。夕方の風が涼しく吹き抜ける頃(五時)、読経が始 の刻まれた大きな石塔の傍らに三基の石塔が立っている。 もすれば無人となる。水棚やオフダはそのまま来年まで放置される。 特に子ども達にはマキを配って食べさせる。お経が終わって三○分 自分の所属する小石塔にお参りする。吊り下げられたマキが村人相 りして同じことをする。村人たちも各々に立ち上がってオコーソと、 水棚にミズノコを供え、水を掛ける。 約二〇分。 お題目(参加者も唱和)、そして締めくくりの経文と続く。 品第二六の陀羅尼などが転読され、そのあと団扇太鼓を叩きながら 方便品第二、寿量品第一六の偈(げ)、如来品第二一の偈、 寺の住職と副住職(その夫人)で、墨染めの法衣に紫の袈裟をかけ 取り巻くように立ち、あるいは座って、談笑しながら法要開始を待 互に配られ、食べると健康になるといってその場で食べる人もいる。 つ。帰省した家族連れの姿もある。師匠 法要 夕方になると七~八○人の村人たちが集ま 読経が終わると二人の導師は立ち上がり、オコーソ前の 翌朝は善福寺にて精霊送りが行われる。 続いて各小石塔を次々にお参 (導師) を勤めるのは善福 b), 境内隅の題 オ その前に コ 。この間 陀羅尼 ] . シ を

で終わると、 午前六時、 三々五々帰宅していく。 水棚にミズノコを供え、水を掛ける。 住職 の読経が始まる(立ったまま)。 ひっそりとした精霊送りの終了であ 参会者もそれに 約一 五分ほど

致する。そしてタブーの強いガロー九つあるので、区も九つあった可能:井泉 (クミカワという) を持ってい 低地に田んぼがある。 る。川を挟んだ三つの小台地に集落が展開し、それぞれのすぐ下方る低い台地を広田川がU字形に大きく蛇行して流れ、台地を三分す 広田集落の東の海岸沿いに広田遺跡がある。 (クミカワという)を持っていた。井泉はあと二つあり、合計 区も九つあった可能性がある。 集落は現在は七区に分かれ、それぞれが古い これは石塔の数と一 そこから陸側に連な

と思われる。広田を詳細に検討した 開拓者の祀った神であろうと指摘す 井泉とガローと小石塔は見事に一致 山が七つあるが、二つは忘れられた とともに、村落の形成過程の一端 るであろう墓制や祖霊祭祀を伝える 性格については、墓地は別にあるの 係にあったとされる。さらに石塔の 下野敏見氏によれば、これらの区と も見せている。 石塔祭りはそうした古代にも遡 それぞれの区内の住民は同族関 祖先(開拓者)の墓ではなく、



最近整備された石塔山 写真1

に三基の りはそれらのもとの姿を伝えるもの 誌』に誌されている。広田の石塔祭 とが下野敏見氏の『タネガシマ風 て各様の石塔祭りが行われていたこ どにあり、 で善福寺住職による精霊迎えがあ 子島全島のあちこちの墓地やお寺な は必ずしもないが、同様の石塔は種 粒が供えられる。石塔山という形で コーソに相当)。 水棚の上にはミズノコではなく、 善福寺からもらったオフダと、 の石塔の 盆には集落民がお参りし 4 八月一〇日にここ がある(広田 0) 物 才



写真2 壁面に埋もれかかった石塔

て貴重な事例である。

- 下野敏見 一九号(法政大学『 -野敏見 一九六 種子島の民俗』Ⅰに所収) 種子島の村落構造」 日本民俗学会報
- 一九六九 『タネガシマ風物誌』 未来社
- 下野敏見 政大学『種子島の民俗』Ⅰに所収 一九七三 種子島広田の民俗」『民俗研究』 六号 法
- 徳永和喜 一九八三 『種子島の史跡』 和田書店
- 南種子町郷土誌編纂委員会 一九八七 写南 種子 町郷土誌」

松原 武実)

# [その他]

石塔山は平山地区内では浜田にもある。 集落はずれのチャヤン峯

# 30 西之(種子島)本国寺盆祭り

[伝 承 地] 熊毛 [別 名] なし

承 地] 熊毛郡南種子町西之

[実施場所] 南種子町西之の本国寺||実施時期] 毎年八月一六日の午後三時頃

伝承組織] 西之校区

### [名称]

本国寺盆祭り

[実施場所]

# 実施時期]

時頃より境内にて盆踊りが踊られる。

新暦八月一六日の午後二時より本国寺にて法要、そのあと午後三

# 伝承組織]

⑥上西目(野尻・木原)、⑦中西目(小田・前之原)、⑧下西目(シ本村(ホンムラ)・崎原、西は⑤砂坂・官三牧(カンゾウマキ)、る。それぞれ北から南へとあげると、東は①野大野(ノオオノ)・を東と西に分け、さらに四グループずつ(合計八グループ)に分けを東と西に分け、さらに四グループずつ(合計八グループ)に分けを東と西に分け、さらに四グループがの、倉計八グループ)に分けを東と西に分け、さらに四グループがの、東は①野大野(ノオオノ)・

とになっている。例えば、東から二組が踊ったとすると、翌年は西以上の東と西が毎年交替で、それぞれ二組ずつの盆踊りを出すこモニシメ)である。



西之集落



盆踊りの様子

予定だったが、一ないグループも 能大会 ⑤が踊った。 そのリハーサルの意味もあって東②に替わって西⑥が踊った。平成 二九年は西から二組が出る予定だったが、前年の事情から東②と西 盆踊りでなく「ヤートセー」を踊った。 れる事態が顕在化した形になった。 いグループも出ている。平成二八年は、 (於東京の日本青年館) に出場することが決まったために、 が 踊 ただ西⑤は踊り子不足や師匠不在などのために本来の る。 西 の ⑥ 年は人口 (上西目) 野尻・木原が第六五回全国民俗芸 減少のために盆踊 将来の盆踊り継続が危惧さ 東の②と③の二組が踊る りを踊ることが でき

#### 田 来. 伝承]

集落 ではなく、 けなが」と「きのぎの」を踊った。ところが大正一三年頃より、東 に奉納した。東方は「きのぎの」と「ツンタン拍子」を、西方は「た よる新興集落のため盆踊りを持っていないためで、 敏見氏の報告によって記す。 西が年交替することは同じだが、それぞれが東全体・西全体として 方と西方に分け、それぞれ男子青年が集まって、毎年交替で本国寺 る で村田熙報告(参考文献参照)によって記す。本来は西之を東 前の盆踊り実施の様子を伝える村人はほとんどいなくなってい 昭和三〇年代当時、 (二組)、西から二集落 (二組)が踊るという現在の形となっ 他集落の踊りを稽古して踊る。 集落を当番で決めて踊ることになった。つまり東から二 東西の各集落が伝承していた盆踊りを下野 東に野大野・上瀬田がないのは開拓に 割り当てられた

平 田 野 村 代 (下田代を含む) (崎原を含む) 「ツンタン拍子」 "ツンタン拍子」 ツンタン拍子」

坂 (官三牧を含む)

たけなが」

「きのぎの」 「きのぎの」

たけなが」

西

中西目 西 目 小田・ (野尻・木原) 前之原

たけなが」 きのぎの 一きのぎの」

> る。 も踊り方も若干の相違がある。 踊 平成二八年に踊った平野と上西目の内容については後述する。 りとしては三種 類あった。 三種類の踊りはそれぞれ七曲から成 ただし同じ曲でも地 地区によ って歌詞

# [実施内

年はまず平野が「ツンタン拍子」を踊り、 サルを行ってから本国寺に向かう。 が始まり、 「たけなが」を踊った。 当日は出場地 終了に合わせて境内にて盆踊りの開始となる。 区は地元の公民館に集合し、シクミと称するリハー 本国寺では午後二時頃より法要 次に上西目(野尻・木原) 平成二八

が

二・鉦一・踊子一○数人だが、地区によって大太鼓や鉦が抜け、 花笠をかぶる。 特の覆面を付ける。中の大太鼓・小太鼓・鉦などはカムキではなく 太鼓が加わる場合がある。踊子の服装は各様の浴衣(白い着物で統 する地区もある。)に黒足袋・草履で、顔にはカムキと称する独 全体を通じて踊りの構成は大太鼓(打ち手と抱え手)一・ 小太 中 鼓

も地区によって異同があるものの、 曲から成り、 口 方とも第一曲と第七曲を除いて、二回ずつ繰り返される。 進む。以下に平成二八年に踊った平野と上西目の歌詞を掲げる。 終わると、 各曲冒頭には裏声による「ヒーヨー」のかけ声が入り、一曲を踊り しており、本来の縦笛がどういうものだったかは不明。いずれも七 の時に踊子の先頭が縦笛を吹く。 二列で入場し、 かえし」という。 り、または反時計回りに回りながら踊る。 中はしゃがみ込み、二度三度のかけ声があって次の曲へ 歌詞は意味の取れないまま伝承されており、 楽器を中にして踊子が輪を作って取り囲み、 縦笛は今はリコーダーなどで代替 旋律はいずれもよく似ている。 地区によっては入退場 歌詞内容 一度目を 時

# 平野の 「ツンタン拍子」

(輪中の楽は小太鼓二、 鉦 0 入退場では奏打と笛

# 第 1 回

さても見事なおつずの馬よ、下わしんじくからしまのふとん、 ふとんばりょして、こしよ主をのせて、

ことづけしよねど、筆にことかぐ、すずり墨わもたぬ 行けば山の中四五軒目の茶屋に、 様わのぼるか、わしゃ今くだる、文をやどねど、

寄りてたもれよ、必ずたのむ。

第2曲 これのお庭(手踊、反時計回り、 繰り返し)

これのお庭に詣りてみればおもしろや、 さても見事なお寺のお厨子、潮ふりいでし伊豆見れば 心わ波の田子の浦、立つ波の世わ長けれ、世わよけれ。

第3曲 阿波の徳島(扇子踊り、反時計回り、繰り返し)

人の軒端で夜を明かす、さしてや悲しさ泣き沈む、 父よ母よと訪ね行く、日に行き暮れて野に寝たり、 阿波の徳島十郎兵衛娘、親に会うちゅうて巡礼姿、

これほど親を慕う子を、母といわずに別れの悲しさよ。 どこの宿でも泊めてわくれぬ、母のお弓にちょっと会うて、 幾夜幾日訪ねても、親の行き先や知れもせぬ、 さてや我が子やなつかしや、抱きつ抱かれつ親子のなげき、

第4曲 にくの一八(手踊り、反時計回り、 二九の一八で呼ばれきて、四六の二四で子ができて、 五六三〇でいね去れと、是非にいねならいねもしょうが、 繰り返し)

第5曲 もとの一八にしてもどせ。 墨と硯は(扇子踊り、反時計回り、繰り返し)

墨と硯わふた思い、我わこの世に捨てられて、 お初お咲の二人づれ、あさじが原の道の下、

せめてわ胸の苦しさよ、徳兵衛が身のあじきなさ。

第6曲 美濃と近江の寝物語りのうわさ、百夜寝ばなし恋ばなし、 美濃と近江(手踊、反時計回り、繰り返し)

夜更くる妻戸に身は濡れかかる、

ちろちろふる細雪の、

月にもゆこえ闇にもゆこえ、闇にほ つほ 0 九 +九宵 この百物

第7曲 かごで妻持ち加世田で育ち、小鳥はかわねどかご恋し。 退場 扇子を開かずに右手に持つ、反時 (終わると奏打と笛を吹きながら退場) 口

# 上西目 (野尻・木原) の「たけなが

、輪中の楽は大太鼓一、小太鼓一、 カネー、 入退場には笛が加わる)

第 1 曲 かねとりてにし、うれしうれなわ武蔵野の、 デハ(踊らずに反時計回り) しんますやまの

わが思い草の、しげれしげれしげれよ、 治まるみ代こそめでたけれ。

第2曲 睦ましや (手踊、時 かわるるものわ、たがよいに、そめして、黒髪の、 睦ましや、またえとしさに、にしだせめの、 計回り、繰り返し) かねてよごとに、

第3曲 秋の田の(扇子踊り、時計回り、繰り返し) ますのすすき、よすすき、なびくな、きよくものかなや。 むつれいてとけるよ、たのもしや、たのわあきのの、

あきのたの、刈り穂のいろを見るからに、

とうから鶴が六つ連れて、また六つ連れて、一二つれ、 さてもさても、さてもめでたい御代(ごよ)ごよなれど、 いちぶに米(こめ)が七俵(ななたわら)、

そがのよ、つれいとう、ころざす。

第 4 曲 よよの(手踊り、時計回り、 繰り返し

なじゅみし、かさねしあまたのせきよ、 とーまくら、えんとえんとの、よいもとよーいに、 代々(よよ)のたけながわ、えだもとよいに、しめてよ、 かりもよいに、はだとはだとめ、よりもとよいに、 しまら、えのもとよいに、いつのいふれーしののまくら、 しのぶながしのもとよいに、んなれど、よいにふら よし いこのこのよい、このこのこの、

こまくらもちて、 いくよかさねしな、 しながわえのもとよ \ \ \

第5曲 ちばやふる、ちばやふる、 ちばやふる(扇子踊り、 神の前の鈴の音、 時計回り、 繰り返し

神楽をとりて、 さんさすどこへ、まんざいの国 わ

第6曲 いのちをたのむ、あいおれいの、お松風。 下には(手踊り、時計回り、繰り返し)

下にわもくの小桜や、 かわにわさぎをこうき、までてしえー、

わけゆてえいの、いのいとざくらー、

とらの千里を通う恋の道、しのぶにつうわ、 えいほーよー、すずねしの、くまがえの、 いくてあまたのなれゆうて、 せめてひとよわ川 たけきこころわ、 船に、

第7曲 南さがりの堀川の、 ありあけざくら、 あと歌(手踊り、 君わ情けのうそざくら。 しらさぎおりてホロロ打つ、 扇子を閉じたまま持つ、 右回り)

まことにそれがめでたけれ。 ホロロわうたずにつるの子が、 ぜにかねふまえて舞を舞う、

(終ると奏打しつつ笛を吹きながら時計回りに廻って退場)

### 「その

検討が急がれるところである。 でも伝承が困難となっており、 踊りがあり、 薩南諸島では屋久島や三島村・十島村にも県本土とは別系統の 種子島のものはむしろこれらと似た部分がある。 今後の課題として、これらとの比較 どこ 盆

# 参考文献

- 書第九号』 下野敏見 九六二 種子島盆踊」 『鹿児島県文化財調査報告
- 村田熙 財調查報告書第一九号』 九七二 「南種子 西 野 小田の盆踊り」 『鹿児島県文化
- 集』南方新社 下野敏見 『南日本の民俗文化誌五 種子島民俗芸能
- のを補筆修正したものである。 本稿は昭和三八年一〇月、種子島博物館より謄写印刷によって発行されたも

(松原 武実)



どういう経路で種子島にもたらされたのか今のところ不明である。

らは上方や江戸から伝えられたであろうことを想像させる。いつ頃、

旋律は悲哀を帯び、手の振りや足運びは優雅でむしろ女性的で

数曲を組にして男だけが踊るもの

県本土にはこれらと同様な盆踊りはない。右に掲げた歌詞か

ある。

ずれも太鼓とカネの伴奏のみで、

の上中(かみなか)の上野の信光寺でも近年まで踊られていた。い が続いているのは西之表市横山とここのみである。南種子町中心部 和三○年代の調査による。)で明らかにされているが、

現在も伝承

系の盆踊りは種子島各地にあったことが下野敏見氏の報告

公民館での練習の様子 写真1



盆踊り本番の様子 写真2

### 32 楠 川 地 ち <u>又</u>〈 の 岳参り行事 ぎょうじ

タケマイリ、 「所願」、 「集落の 1 コロガ が願掛け」 0) コーガン 意)

別

承 熊毛郡屋久島町楠川 地 区

伝 八月二七日

[実施場所] 楠川集落天満宮か から楠川 前岳山頂まで

伝承組織 楠川 地区住民

[名称]

タケマイリと称される。

称される。

参加者自身を「今年のトコロガン」とも称している。

集落の願掛け」の意味で、

「所願」と

# 実施場所・実施時期・ 伝承組織]

組となり、一組は、一日早く奥岳に泊まり掛けで参詣し、今一組は供えていた。集落から願掛けと願解きを行う参詣者が、二人ずつ二る目的で、漁業者が獲れた魚を持って岳参りを行い、それを神前になかった。トビウオ漁を行っていた当時は、山の神に大漁祈願をすに草鞋、脚絆姿で参詣した。また、忌中の者や女性は登ってはなら 組は、 更に奥に位置する奥岳(石塚山:標高一五八九メートル)山頂まで 杉で落ち合い、 楠川集落後背の楠川前岳へ日帰りで参詣する。戻りで両組は、三本 岳参りを行っていた。その際には、二組に分かれ、 を採取し、 辺で海砂と海藻(ホンダワラ:二〇一七年の 祀られる山の神に参拝するために行う行事とされる。 楠川集落の背後に位置する楠川前岳山頂(標高 山中で一泊した。 天満宮灯籠に供えた後、 燭などを山頂の石祠に供え、 集落に帰った。 かつて参詣者は、 参詣当日の早朝、 海砂、 海藻、 男性のみであり、 集落繁盛、 参詣では採取されず) 楠川天満宮前の海 石塚岳まで参る 八五メー 家内安全、 かつては、 洗米、 白装束 ŀ



楠川集落周辺



石祠を拝む

行われる。 ち向かえ場」と称される正木の塚状の森でサカムカエ海安全、五穀豊穣,豊漁を祈願する。参詣から集落に 参詣から集落に戻ると、 (坂迎え) う

が

# 実施内容

### 日

けのタケマイリ、八月一五夜に願解きのタケマイリを行ったと言う。 前夜、天満宮か寺院でお籠もりをしたとされる。以前は四月に願掛して行われた。奥岳への参詣は行われなかった。かつては、出立の二〇一七年のタケマイリは、八月二七日に、楠川前岳への参詣と 期日とした。 の場に招待することもあった。集落住民が参加しやすい様に現在の 願解きのタケマイリでは、集落に戻ったトコロガンを十五夜綱引き

#### 現況

からノノヨケと称される山への入口、奥岳への入口と考えられていは行かず、楠川前岳山頂への参拝となった。登坂のルートは、集落 る三本杉、前岳山頂となる。かつては、 二〇一七年八月二七日に岳参りが催行された。本年は、石塚岳に

更に小杉谷を通って奥岳まで参詣 L

海砂の採取と天満宮からの出

#### けに山に登れば、 真1)に岳参りの祭礼係が参集する。 して位置する氏神社の楠川天満宮 午前五時三〇分、楠川集落の浜に面 人、消防団長一人、願掛け二人、 (所願) 願ほどきにもう一度 「関い」のである。 原掛 一人である。

区長一

 $\vdash$ 

登る必要があるとされる。



写真1 楠川天満宮

た時間に と呼ばれる竹笹でこの砂を包んでい する(写真2)。かつては、ダンチク りの参加者は、浜へ降り、波打ち際の 集落の後背の楠川登山歩道を通り、 岳に向けて出発する。ルートは、 する。午前六時頃、天満宮境内から前 た。全員で天満宮に参拝した後、出発 浜砂を採ってビニール袋に入れて所持 水平線から太陽が昇り始める頃、岳参 天満宮の社殿内に、岳参りで用いる蝋 は、 願を 供え物などが準備される。 まだ朝日 ,って参 が昇っておらず、 する代 楠川

楠川前岳を目指す。

# ノノヨケへ参詣

2

んだ砂を供え、榊を左右に飾り、焼酎(三岳)を茶碗に注ぎ、祠一円玉や焼酎の一合瓶が供えられている(写真3)。海岸から運の大樹の根元に石祠が祀られた場所があり、石祠には数一〇枚の所を越える。この境界をノノヨケと称する。この場所の近くに杉 前に置かれた平石の 楠川集落後背の道を上るが、 途中で里と山との境界とされる



写真3 ノノヨケの樹木 と石祠



写真2 海砂を採取する

とはび御 カュ なり急ば 川酒 登山げ し、が、年 道 の、拝み であり、 坂やガレ場をも登あり、四十七曲がり登山を続けるが、道蝋燭の火を消す。再 わ ると、 酎 で

る。 た赤いテープを目。道がない場所は、 呼 れる上り坂や プを目印に進んでい 樹木に付けら

-前八時 杉へ

一本杉

写真4

到着する(写真5)。三本の屋久杉が本杉は、三本の屋久杉が根本で融合した特異な形は、三本の居魚に、平坦になり腐葉土が堆積した洞があり、そこに石碑が納められている。杉が融がかめられている。石碑ががかられている。石碑に、浜砂、洗米、塩、焼酎なめるが、土に埋没しており、ためるが、土に埋没しており、ためるが、土に埋没しており、ためるが、土に埋没しており、ためるが、土に埋没しており、ためるが、土に埋没しており、ためるが、土に埋没しており、ためるが、土に埋没しており、ためのでは、 0



て拝み、焼酎で知一人一人が火のの

これ、鹿 屋 及杉

や猿巨

木・

灯して立てかける。

次に焼

酎

浜砂を平石の左に盛る(写真9)。

以上

の供え物を捧げ

左に洗米を置き、

至るまで

Щ

を続

写真6 三本杉の洞に供え物を 供える

石碑に被さった枯れ枝などを除い

れるが、

写真5 三本杉

要とされる。 連 続 た ガ レ 相 場 ※や沢、 当の

体

# 午前一一時頃でのは

蝋燭を灯し線香を供える

頂に到着する。 り、 頃、 岩の集積の 頂部分は

字判読不可、 は、正面に「奉 南無中山大権口」(一頭中」(一部判読不可)小さい石祠に 権現」の文字が、 思われる。)と刻まれている。 思われる。)、右側に「立主 きな中央の石祠には、正面に「中山 石碑が並んでいる(写真 (一部判読不可、おそらく「川 の手前に、 基並び、 その背後に小さな丸石の おそらく「現」であると 右から石祠が二基と石 右側に 「楠川 (8)。最も大 楠□□ 村 が対しと (鎌 船大 田



写真 9 海砂を備える



写真8 楠川前岳山頂の石祠 と石碑



写真7 三本杉への 供え物

二礼、二拍、 そ た後各自は線香に火を着け、 10 れを平石に横置きにおいて 一礼で拝む

五分頃、下山を始山頂で昼食の後、 迎えの・ 時頃白谷雲水峡の駐車場で、 と同じル この後、御神酒上げを行う。 車 下山を始める。 に乗り、 1 を進 午後〇時四 む。 登山を終わ 午後一 行き

### 5 サカムカ

午後三時四八分から集落と山午後三時四八分から集落と山 集落に戻

の木製の祭壇が設けられ取した海砂が撒かれ、石 土壇に樹木が生い茂った塚状の森であ れている (写真12)。 彫られている。中央の古い石碑には、 い大きな石碑には「一品法寿大権現」 木製の祭壇が設けられる。 五基の石塔と、二基の石碑が建て 木□(戸か)清次」と彫ら 直径一〇メートルほどの 石碑の周りには、 石祠群の前方左 石祠前には二段 左手の新 カムカエ サ 浜で採 クカムカ

り、

「奉寄進

には榊が建てられ、

その内側に蝋燭が立てられる。

下段の祭壇に

などが披露された。

写真 12 石碑と石祠

写真 10 石祠を拝む 右には、 ビウオの塩焼き、落花生、里芋や昆 晩浸けた餅米をダンチクの笹で包んで蒸 油揚げなどの煮染め、 じめら たツノマキ(角巻)が、中央には、ト 番左の重箱には、 れた丸形の おはぎが入れられている。上段 の婦 重 枝豆、 が三つ並べられ 木灰の灰汁に 用 意し 里芋煮が、

タケマイリから帰った者達を集落の境で ら男性達と女性達が参加し、 が置かれる。このサカムカエには、には焼酎の一升瓶が、拝礼に用いる で拝礼し、その後、 本寺住職兼務)が読経し、 法華宗 (本門流) 本蓮寺住職 (宮之浦久 向かえる形をとる。楠川集落に位置する への参拝者だけではなく、集落の住民か 参拝者が線香を供えて手を合わせて仏式 (写真13)。 集落の者達が拝礼 その後、まず 里の者達が 前岳



サカムカエの森 写真 11



# 民館での直会

真 ・コンニャク・油揚げ・昆布の煮染め、 塩 赤 15)。区長の挨拶の後、 焼き、タケノコと人参のきんぴら、タケノコ・人参・カ 飯のおにぎり、里芋煮、枝豆、 Ш カムカエが終わると、 公民館で直会となる。 料理は、 飲食となる。 楠川集落の 落花生、 先のツノマキ(写真

おはぎなど多彩である(写

薩摩揚げ、

トビウオの

パボチャ

14

*(*)

他

演壇上では、

楠川盆踊



僧侶による読経

### 田 伝

震が頻した。山は鳴動して止ま 七から一 享二 (一四八八) 年には行われ た資料では、ダケマイリ いたとされる。以下資料より 、集落からご提供 四八八)に屋久島に地 <u></u> 四

ない。



写真 15 直会の料理

れて御岳にのぼり七日間の誦経を唱えたところ奇しくも鳴動がおさ日増上人は、長享二年(一四八九)六月屋久島に渡って弟子達をつ だった京都の本願寺七世管長日増上人に屋久・ 参詣する行事とし いう)が建てられた。」ものとされる。この事績が、現在のタケマ め各山頂に法札(最初は木柱のち碑石、俗に「一品法寿大権現」と まったと『熊毛郡宗教史資料』は伝えている。その折に御岳をはじ 一一代島主時氏は、鳴動を鎮めるため祈願 イリ行事の 継承されていた山岳信仰と関わる可能性も指摘されている。楠川 起源であるかどうかについては、資料では、これ以前か 岳の山の神に海砂を供え、 て認識されている。 願掛け、 (祈祷)をお願いした。 種子の領 願解きを行う為に 主種 子島第

けて屋久町でタケマイリが行われているのは、永田(永田岳)、吉行われている。この調査によると、二〇一三年から二〇一五年にか 岳前 田 おける継承・実施 (吉田岳) **| 久島のタケマイリは、** 椨川(高岳・石塚岳)、小瀬田(愛子岳・向 (三野岳)、 、一湊(一湊岳)、宮之浦(宮之浦岳)、 春 の状況が調査され、また、復活に関わる活動が (前岳)、 屋久町文化財保護委員によって、 (明星岳) 平 野 (蔵灰野)、 、安房 (明星岳・太忠岳・ 麦生 岳)、 (高平岳) 楠川 長峰(向 (楠川 集落

> 宮之浦、 徴的なのは、 域もある。 は男性であり女人禁制とされるが、近年では女性の参加も認める地 四人で行う地域が見られる。基本的にはタケマイリで岳に登るの たは新暦九月の二回が多く、一〇人前後で行う (栗生岳) の各集落と岳である。 時期的には旧暦 船行、 供えものは、 浜砂を供えるという点である。これは、 松峯、安房、春牧各集落に見られる。 (烏帽子岳・七五岳 塩・米・焼酎・賽銭がほぼ共通するが、 尾之間 (宮之浦 中間(七五 島 四・五月と旧暦 男性二人 岳 塚 岳 吉

事を復活している。委員によると、屋久島が世界自然遺産登録され二年前に宮之浦地区でタケマイリを復活したことを契機として、行 されたことも大きな要因であるとされる。 い)、吉田、船行、小島、中間ではシキミや榊を持ち帰るとされ の花や枝を岳から持ち帰ったとされ(楠川では現在行われていな たことで、屋久島の岳や森という自然と人々の生活との関係が見直 マチムケ(待ち迎え)も多くの集落で行われた。 いる。岳から帰った者を向かえるサカムケ(サカムカエ、 また、 これらの集落の多くは、一時、タケマイリを途絶して 永田、宮之浦、楠川、 湯泊、栗生各集落では、 いたが、一 シャクナゲ 坂迎え 7

農事を開始する時期に里へと迎えるという意味も有していると考え 春先のタケマイリで山からシャクナゲの花や枝を里に持ち帰り、 が、漁撈にも深く関わっているとの認識を見ることが出来る。また、 ケマイリを行うなど、沖からも望む事ができる各集落の岳 祀られる権現や山の神であるが、漁業者が、漁期に大漁を願 ことにより、 5 れを集落の各戸に分ける行為は、春を迎えた自然の山野の生命力を、 交歓する行事であるといえる。行事の上で意識されているのは岳に タケマイリは、基本的には海と山とが里の登山遙拝者を介在し ったトコロガンであり、 また、岳への登山と遙拝を行う者は、 .然の生命力溢れる場においてその身を清め、 また、彼自身も神聖な場である岳へ登る 集落全体の願いを背 の山の神 派って タ そ F

南川長客のメディイリこ制して言えば、な再生を行う意味もあったと考えられる。

と、神仏習合の状況が示されており、この点にも関心が持たれる。と、神仏習合の状況が示されており、この点にも関心が持たれる。集落と山との境界に聖なる森として設けられている所にも特徴が見られる。山の神が納める神聖な岳の自然の空間と生活の場であるが、途でして今一つの自然の空間である海、各々の間に、境界的な聖地がそして今一つの自然の空間である海、各々の間に、境界的な聖地がおけられている。更には、出発点である天満宮は神道であるが、途やの遙拝場所や岳山頂では、柏手を打ちながら線香を供え、サカムカエは法華宗僧侶を迎えて仏式で行われる。行事全体を通じて見るカエは法華宗僧侶を迎えて仏式で行われる。行事全体を通じて見るカエは法華宗僧侶を迎えて仏式で行われる。行事全体を通じて見るカエは法華宗僧侶を迎えて仏式で行われる。行事全体を通じて見るカエは法華宗僧侶を迎えて仏式で行われる。行事全体を通じて見るカエは法華宗僧侶を迎えて仏式で行われる。行事全体を通じて見るカエは法華宗僧侶を迎えて仏式で行われる。行事全体を通じて見る力とは、出発する天満宮は海に面楠川集落のタケマイリに関して言えば、出発する天満宮は海に面楠川集落のタケマイリに関して言えば、出発する天満宮は海に面

# [参考資料]

- 鎌田道隆氏手稿 二〇一一 「楠川村岳詣り」
- 牧実寛氏手稿 二〇一七 「楠川歩道(登山道)について」「楠
- 一三~二〇一五)」 「各地区岳参りの現況調査票(二〇川岳参りコース」

(徳丸 亜木)

### 31 あくせきじま

# 悪石島のボゼ

名 十島村悪石島の盆踊り

伝別

[実施時期] 承 地 旧曆七月一六日 鹿児島県鹿児島郡十島村悪石島

[実施場所] 悪石島 テラ

· 伝承組織 悪石島の盆踊り保存会

## 実施時期

[実施場所]

悪石島の「テラ」で行う。

旧暦七月一六日に行う。

# [伝承組織]

悪石島の盆踊り保存会が行う。

# 実施内容

のビジュアルが定型化する前の人々が持っていた素朴な「異形観」 ずれにも類型できないところに大きな特徴がある。「鬼」というもの れている。日本中に様々な形態の神や鬼、化け物があるが、そのい 色は赤土色と黒の縦の縞模様で、体は青々としたビロウの葉で覆わ にお椀のような目、 たらしたと思われる。 悪石島のボゼは、 島にある物でつくるというブリコラージュがこうした形態をも その下に大きく開いた口がある異様な容姿で、 大きな耳のようなものが頭からのび、 その根元

と呼ばれる場所に、三人の若者が赤土と墨を塗りつけた仮面を被り、 れ場を乱し、人びとの邪気を追い祓う。集落の墓地に隣接するテラ

盆の最終日となる旧暦七月一六日の夕刻、

盆踊りの最中に突然現

ピロウ山

悪石島集落周辺



3体のボゼ

場を戻すために最後に盆踊りがもうひと踊りされ、 端に付けた赤い泥を人々に擦り付けようと、 れ、盆踊りで人びとが集まる広場に現れる。ボゼは、ボゼマラの先と称する男根を模した長い杖を持つ。ボゼは、呼び太鼓の音に導か して夜が更けるまで歌って踊り、飲食に興じる。 こうして、邪気が祓われ、清まった人びとの安堵と笑顔が満ちる中、 たりとした調子に変わると、ボゼは体を揺するようにして踊りはじ いう。騒ぎがしばらく続いたのち、 がうなどして、 体にはビロウの 悪魔祓いの御利益があるとされ、 再度急変の調子で再び暴れだし、やがてその場を去っていく。 辺りは笑いと叫び声で騒然となっていく。この泥を付けられる ボゼに扮する。手には、それぞれボゼマラ、マラ棒 葉を巻き付け、手足にはシュロ皮やツグの葉を当て 乱打されていた太鼓の音がゆっ 特に女性は子宝に恵まれると 観衆を追い回すことか 以後は余興と称

ると思われる。ラ」呼称もこれらと同様の系統の言葉で、おそらく墓地を指していり」呼称もこれらと同様の系統の言葉で、おそらく墓地を指してい人骨を祀ってある洞穴を指す言葉だと指摘しており、十島村での「テーまた仲松弥秀は、「テラ」という呼称について、琉球列島では、元々

### [意義]

ることも、日本列島における暦のあり方、一年の区切り(節)を考本土の仮面神は冬・春とするのに対し、盆という夏・秋の時季とする。特に、その異形異体の様態は希少である。また、現れる時期が、本件は、トカラ列島における来訪神行事の典型例を示すものであ

を考察する上でも有意義な行事だと言える。ヨーロッパの仮面神「クランプス」の共通点などもあり、人類文化為を伴うなど、我が国の来訪神を理解する上で重要であるとともに、える上で貴重である。また、邪気を祓うとともに子孫繁栄を促す行

# [参考文献]

- 仲松弥秀 一九七五 『神と村』 伝統と現代社
- ・下野敏見 二〇〇五 『南九州の伝統文化』 第一巻、第二巻(木引き) 「ガーヨー『本で木』 任糸で野仕者

(小島 摩文